

郡之神遺跡
第2次発掘調査報告書

1993

山形県
山形県教育委員会

郡こおり のの 神かみ 遺跡

第2次発掘調査報告書

平成5年3月

山形県
山形県教育委員会

序

本書は、平成4年度に山形県教育委員会が発掘調査を実施した郡之神遺跡第2次調査の成果をまとめたものです。

郡之神遺跡は、山形県の南部に位置する飯豊町にあります。飯豊町は、歴史的遺産として史跡の保存と無形文化財の継承に力を入れ、「古きをたづねて新しきを知る」をモットーとした町づくりを進めているところです。

調査では、縄文時代の貯蔵穴と考えられる多数の土壙やピット、江戸時代以降の墓壙や山岳宗教にかかる經塼などが発見され、これらに関連して土器をはじめとする多くの遺物が出土しました。また遺跡周辺には、先人が生き続けてきた数々の足跡が刻まれており、この地が数万年の昔から肥沃で生活に適した自然環境であったことを感じさせます。

埋蔵文化財は私たちの祖先が長い歴史の中で創造し育んできた貴重な国民的財産であり、一度壊してしまえば二度と元に戻らないものです。調査により明らかにされた遺跡は過去の生活の有様を彷彿と再現してくれるものです。祖先の歴史を学ぶとともに愛護し子孫へと保存し伝えていくことが、現代に生きる私たちに課せられた重要な責務といえるでしょう。

山形県教育委員会では、「心広くたくましい県民の育成」と地域文化の環境作りという立場から、今後とも県民福祉の向上を目的とした地域社会の整備と調整をはかりながら、埋蔵文化財の保護に努力を続けていく所存あります。

本書が埋蔵文化財に対する保護思想の普及もかねまして、皆様のご理解の一助となれば幸いと存じます。

最後になりましたが、調査においてご協力をいただいた地元の方々をはじめ関係各位に心から感謝申し上げます。

平成5年3月

山形県教育委員会教育長 木場清耕

例　　言

1 本書は山形県土木部の委託を受けて、山形県教育委員会が平成4年度に実施した「緊急地方道整備事業（一般県道椿川西線椿松原地区）」にかかる、「郡之神遺跡」の第2次緊急発掘調査報告書である。

2 遺跡の所在地は、山形県西置賜郡飯豊町大字椿字郡之神2591の1外である。

3 発掘調査は、平成4年4月13日から同年6月19日まで、延べ40日間に亘って行った。

4 調査体制は下記のとおりである。

調査主体 山形県教育委員会

調査担当 山形県埋蔵文化財緊急調査団

調査担当者 事務局長補佐 佐々木洋治（調査担当）

主任調査員 名和達朗 須賀井新人

調査員 真壁 建

事務局事務局長 深瀬征二

事務局長補佐 鈴木常夫（庶務担当）

主任調査員 野尻 侃

主任事務員 永井健郎

事務員 渋江正義 松本明美 高橋由佳 志田恵子 大内千賀子

5 調査においては、山形県土木部道路整備課、長井建設事務所道路計画課、飯豊町教育委員会、西置賜教育事務所など関係機関、並びに地元飯豊町の方々の御協力を得た。

6 本書の作成・執筆は須賀井新人・真壁 建が担当した。編集は安部 実・須賀井新人が担当し、全体を佐々木洋治が総括した。

7 遺物実測図のうち打製石器については、株式会社シン技術コンサルに実測業務を委託した。

8 調査記録および出土遺物については、山形県教育委員会で一括保管している。

凡　　例

- 1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

S K…土壤・墓壙	SM…経塚	SP…ピット
S X…性格不明遺構	R P…一括遺物	W …木材
- 2 遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲した。
- 3 土層觀察においては、遺跡を覆う基本層序をローマ数字（I～III）で表し、遺構の埋積土等については「F」に算用数字を付して区別した。また、「G」はグリッドの略記である。
- 4 報告書執筆の基準は下記のとおりである。
 - (1) 調査区概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。
 - (2) グリッドの南北軸は、N—38° 40' —Wを測る。
 - (3) 遺構実測図は、1/20・1/30・1/60・1/300縮尺で探録し、各々にスケールを付した。
 - (4) 遺構計測表中の（　）内の数値は、検出部分の計測値を示している。
 - (5) 遺物実測図・拓影図は縄文土器1/3・1/4、打製石器2/3、礫石器1/3、古銭2/3、経石1/3で探録し、各々にスケールを付した。遺物図版については、縄文土器1/2・1/4、打製石器2/3、礫石器1/3（石皿のみ任意）、古銭2/3、経石1/2の縮尺である。
 - (6) 土器拓影図で、器表面の拓本は断面左側に表した。
 - (7) 本文中の遺物番号は、遺物実測図・遺物図版とも共通のものとした。
 - (8) 遺構覆土の色調の記載については、1987年版の農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に拠った。

目 次

I	調査の経緯	
1	調査に至る経過	1
2	第1次調査の経過と概要	1
3	第2次調査の経過	3
II	遺跡の概要	
1	遺跡の立地と環境	3
2	歴史的環境	7
3	遺構と遺物の分布	7
III	検出遺構	
1	土 壤	8
2	墓 壕	15
3	経 塚	15
IV	出土遺物	
1	縄文土器	19
2	石 器	22
3	古 銭	29
4	経 石	29
V	まとめと考察	
1	遺構について	33
2	遺物について	34

表

表 1	遺構計測表	18
表 2	経石観察表	32

挿　図

図　版

第1図 遺跡位置図	2	図版1 遺跡遠景 遺跡近景
第2図 調査区概要図	4	図版2 重機械粗掘り 面精査 遺構精査
第3図 遺構配置図	5	調査風景
第4図 SK27・41土壤	9	図版3 遺構検出状況 遺構完掘状況
第5図 SK40・128土壤、 SP58・68ピット	10	図版4 SK27・40・41土壤
第6図 SK101・107土壤	11	図版5 SK100土壤
第7図 SK100・104・112・143土壤	13	図版6 SK101土壤
第8図 SK29・106・108・118・138 ・142土壤	14	図版7 SK107土壤
第9図 SK32・42・57・64墓壙	16	図版8 SK29・106・108・112・142・ 143土壤 SP58・68ピット
第10図 SM1 経塚	17	図版9 SK104・128土壤
第11図 繩文土器(1)	20	図版10 SK32・42・57・64・146墓壙
第12図 繩文土器(2)	21	図版11 SM1 経塚
第13図 石 器(1)	23	図版12 繩文土器(1)
第14図 石 器(2)	24	図版13 繩文土器(2)・(3)
第15図 石 器(3)	25	図版14 繩文土器(4)・打製石器(1)
第16図 敲石・凹石	27	図版15 打製石器(2)・(3)
第17図 石 盆	28	図版16 敲石・凹石
第18図 古 銭	29	図版17 石皿・古銭
第19図 経 石(1)	30	図版18 経石(1)・(2)
第20図 経 石(2)	31	図版19 経石(3)・(4)
		図版20 経石(5)・(6)

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

飯豊町椿地区は、縄文時代・弥生時代・歴史時代にかけて、断続的ではあるが人々の生活の場となった遺跡が散在している地域である。

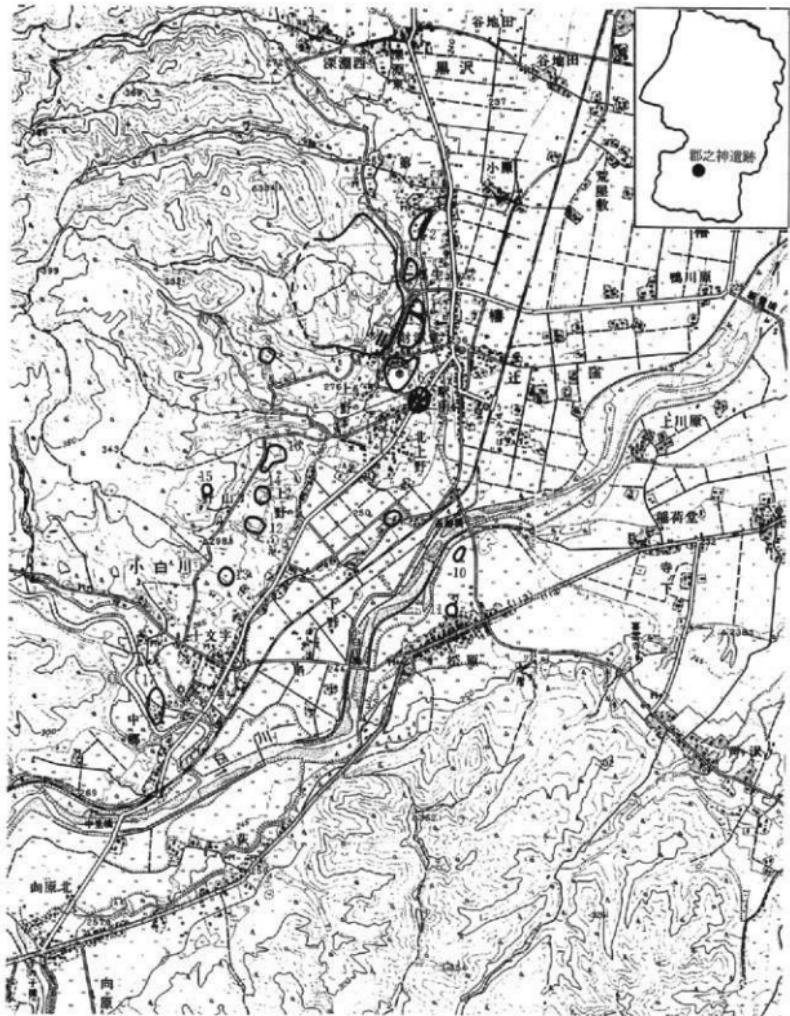
郡之神遺跡は、昭和52年11月に山形県教育委員会が主体となり、県道長井・飯豊線特殊改良第1種工事にかかる緊急発掘調査が行われた経緯がある。調査では、縄文時代の土壌やピットをはじめ祭祀の要素をもつ配石遺構や、「三段塚」と呼称する山岳宗教に関する江戸時代の遺構などを検出している。

今回の発掘は、一般県道椿・川西線（椿～松原地区）の整備事業に先行する記録保存を目的とした第2次調査である。昭和63年9月、県土木部より遺跡詳細分布調査の依頼が出された。これを受けて県教育委員会は同年11月、事業計画及び実施予定区域について、遺跡の所在並びに事業区域との係わり等を確認する表面踏査（A調査）を実施し、畠地を中心で多数の石器片が採集された。さらに平成3年10月には、遺跡の範囲や性格等を明らかにする目的から試掘調査（B調査）を実施した結果、遺構・遺物の検出状況より遺跡の範囲は事業予定地まで広がることが確認された。これらの資料をもとにして、事業主体である県土木部長井建設事務所、地元の飯豊町教育委員会や西置賜教育事務所などの関係機関と協議を重ね、今回の緊急発掘調査を実施するに至ったものである。

2 第1次調査の経過と概要

郡之神遺跡の第1次調査は、県道長井～飯豊線特殊改良第1種工事に係り、県教育委員会が昭和52年に実施している。改良工事のうち、椿地内については新しいルートでの建設が計画され、遺跡にかかる部分の1,049m²が対象となった。調査期間は昭和52年11月1日から同年12月2日までである。調査区の地目は畠の他、公園・原野・墓地・宅地となっており、畠一帯にはおびただしい量の縄文土器片や石器片の散布が確認されている。墓地は当時三戸の所有となっていたが、他に不明な墓標もあることから、以前は相当数の墓が存在した可能性があるとされた。また付近には高さ2m程の塚が2基現存し、地元では十三塚の2カ所のみが残ったという話であったらしい。

調査では、縄文時代の土壌31基・ピット12基・配石遺構1基、江戸時代前半の構築と考えられる三段塚2基、それに近世から現代に亘る墓塚11基が検出された。縄文時代の土壌は形態的に袋状と皿状を示す二者に分かれ、袋状を呈するものは塚底に多量の土器を含む特徴を有する。配石遺構は三段塚に切られるため全体の規模や形態は不明であるが、「コ」の字形に曲がる南辺の列石状況より察して長方形を呈すると考えられる。確認された配石内には7個の礫を用いた石垣状の集石が認められ、付近から縄文後期初頭に位置付けられる完形の深鉢形土器1点が出土している。このような状況から、遺構の性格として祭祀の要素が推測できるとしている。2基存在する三段塚は調査の都合上、現形が明瞭に残る1基について精査が行われた。高さ1.9m、一辺約8mを測る方形のこの塚は、外側に幅



- | | | |
|----------------|--------------|----------------|
| 1 郡之神遺跡（縄文・近世） | 7 帽館（中世） | 13 野山II遺跡（縄文） |
| 2 沼の尻遺跡（縄文） | 8 横山遺跡（縄文） | 14 野山III遺跡（縄文） |
| 3 新山遺跡（縄文） | 9 契約塙遺跡（縄文） | 15 野山IV遺跡（縄文） |
| 4 裏山I遺跡（縄文） | 10 聖場遺跡（縄文） | 16 野山V遺跡（縄文） |
| 5 裏山II遺跡（縄文） | 11 町下遺跡（縄文） | 17 才先林遺跡（縄文） |
| 6 裏山III遺跡（縄文） | 12 野山I遺跡（縄文） | |

第1図 遺跡位置図 (S = 1:25,000)

1m程の周溝をもち、周溝より掘り上げた土壌を用いて版塗を行っている。出土遺物がなくその性格は不明であるが、出羽三山信仰の修験道に係わる供養塚と推定されている。

3 第2次調査の経過

調査は、道路整備事業の計画路線内で遺跡範囲にかかる1,600m²を対象としている。始めに、計画路線センター杭を基準として5mを単位とするグリッドを設定した。平成4年4月14日より重機械を導入して調査区の表土除去を行ったが、県道拡幅部分については現況用水路の確保と地盤が軟弱なことから、手掘りによる2m幅のトレンチ調査に限定した。表土除去と並行しながら面整理を実施し、21日までに遺構プランの検出作業を終了した。22日より遺構配置図の作成に取りかかり、同時に検出遺構について調査区東側から順に掘り下げを開始している。

連休をはさんで5月11日に現場作業を再開し、遺構を半截またはベルト状に残して、順次土層セクション図等の記録を取りながら掘り下げを進めた。調査区東半部は、最近まで公園の一部として使われていたため随所に攪乱が見受けられ、明かにその影響によると判断されるものについては、写真撮影のみの記録にとどめ完掘を行った。20日からはこれまでに終了した完掘区域について、方眼区割りを組んでの平面実測図作成を並行して実施した。26日には調査区西端に設置した現場事務所をこれまでの調査終了区域に移転させ、人力によるこの部分の表土除去を行い、以下同様の手順で6月中旬まで調査を進めた。調査区北西端に位置する塚の調査は、6月15日の最終週に着手し、18日には成果を公表するため一般の方々を対象にした調査説明会を開催、翌19日に機材の撤収を行った。

II 遺跡の概要

1 遺跡の立地と環境

飯豊町は、飯豊山を主峯として北に伸びる越後山塊と、白川が造り出す肥沃な沖積平野に面している。町の南部は飯豊連峰の1,000m級の山岳地帯で、北西部は朝日連峰に属する山地となっており磐梯朝日国立公園の一部をなしている。飯豊山中に源を発する白川は飯豊連峰から北東に向かって町を貫流し、長井市の愛宕山手前で最上川に合流する。平地は白川河口の氾濫灘及びその本・支流沿いの谷底の平野部に限られ、町域の13%に過ぎない。気候は内陸型の特徴を示しており、寒暖の差が大きい。夏は高温多湿で、冬は雪が多く1m以上の積雪になる。風は比較的弱いが、山間地形のため局的に季節風の強い所がある。日照時間は冬季間にを中心にかなり短いものとなっている。

遺跡はJR米坂線羽前椿駅の西方約400m、白川中流域左岸の標高243mに位置する。付近は侵食作用によって形成された舌状の白川第1段丘が緩やかに張り出しており、遺跡は標高243mを測る段丘東端部に立地している。段丘上位面と下位面とでは約7mの比高差があり、「上野」・「下野」の地名が示すとおりである。現状の地目は畑が主で、他に杉林、公園（遊園地）、宅地、墓地となっている。



第2図 調査区概要図 (S = 1:2,000)

2 歴史的環境

郡之神遺跡周辺には、白川流域に沿って数多くの遺跡が分布しており、そのほとんどが縄文時代に属している。上流には県指定文化財になっている上屋地遺跡（旧・中石器時代）、數馬遺跡（縄文時代晚期）などがある。中流域では松原地区に所在し縄文時代後・晚期を中心とする町下遺跡、小白川地区に所在する契約壇遺跡や野山Ⅰ～Ⅴ遺跡、椿地区に所在する沼之尻遺跡・新山遺跡・裏山Ⅰ～Ⅲ遺跡・横山遺跡など、いずれも縄文時代の遺跡として知られている。弥生時代以降の遺跡も断続的ではあるが散在しており、豊かな自然に恵まれて生活に適した環境だったことが窺われる。

椿の地名の由来は、正暦3（992）年京都から行脚を続けていた恵心僧都がこの地に立ち寄った際、大福寺という寺の裏にうっとうと生い茂るツバキの大木に目をとめ、住民の無病息災と五穀豊穰を祈願して仏像三体を彫刻し、これを安置して部落民を苦境から救うよう言い残して立ち去ったことから付けられた、と伝えられている。

中世では、白川の第2段丘面に幾つかの城館跡が分布している。本遺跡の北西部に位置する椿館跡は、付近を館ノ沢ということから館ノ沢遺跡とも呼ばれる。山の舌状に突き出した首部に空堀と土塁が確認されており、今年度飯豊町教育委員会が調査を行っている。この北向いの山を「追館山」ということから何か関係があると推測されるのだが、史料や言い伝えが全くなく今後の調査が期待される。

また、本遺跡を含む周辺の小字名には「郡之神」をはじめ「山の神前」「寺屋敷」など、信仰にかかわる靈域の存在を思わせるような地名が残されており、今回の調査でも検出された江戸時代前半の経塚と墓域との関連性を考えられるところである。

3 遺構と遺物の分布（第3図）

今回の調査で検出された主な遺構は、縄文時代の土壙30基、近世の墓壙17基、経塚1基などで、登録した数は135基である。小穴・ピットについては遺物が出土したものを対象に番号を付しており、遺構の検出総数は270基あまりに及ぶ。この内、調査区東半部に多く見られる略円形の落ち込み（SX22・47等）は風倒木もしくは抜根によるもの、また西側で検出された方形に巡る溝状遺構は、家屋の基礎工跡であると思われる。遺構の分布状況では、縄文時代の土壙が調査区の東西両端に、小穴が中央部南側に多く分布する傾向が窺われる。この中で調査区東側検出土壙群は、形態的にいわゆるフラスコ状を呈するものが含まれ、出土遺物から判断して縄文前期前葉に比定される。これに対し西側検出の土壙群は、出土土器の相異から縄文中期末葉の構築が考えられる。近世墓は56・57・65グリッド付近と、調査区東側南辺部のふたつのブロックにまとめて配置されることが窺える。

調査で出土した遺物は整理箱にして18箱を数える。内訳は縄文土器5箱、石器・剣片4箱、礫石器2箱、経石6箱、その他古銭や自然遺物などが1箱である。遺構内に完形土器や一括遺物を包含するのはSK27・100・101・107土壙に限られ、他は散在的で出土量も極めて少ない。また、遺物包含層が調査区東半部ではすでに削平されており、包含層出土として取り上げた遺物が分布する区域は調査区西端および中央域の一部に限定される。

III 検出遺構

1 土 壤

土壤として登録した遺構は45基である。壙内出土遺物や形態的特徴から、この内の30基は縄文時代に属するものである。ここでは、その代表的なものについて概要を述べる。

SK27・41（第4図、図版4）

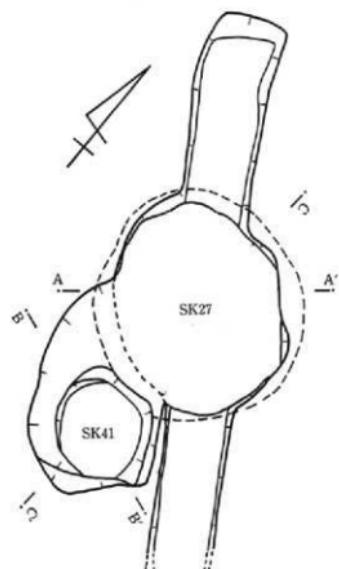
調査区東端の67・68—63・64グリッドで検出された重複関係にある土壤で、SK27がSK41を切る。SK41は遺構検出時に確認できなかったが、SK27掘り下げ中に壁面での重複が解り、再度検出面精査を行ってそのプランが明確になった。

SK27は平面プランが東西径120cm、南北径110cmを測る梢円形を呈する。中央部で南北方向に幅40cm程を、旧公園施設の基礎工跡によって最上部が一部破壊されている。確認面からの深さ62cmを測り、底面は平坦で硬くしまる。断面形は中膨みのいわゆるフラスコ状を呈し貯蔵穴と考えられるが、覆土の堆積状況から周壁の崩壊が予想されるため、機能していた当時の形態とは異なると判断される。覆土は基本的に4層に分かれ、黒褐色砂質土を基調とする。遺物は土器片33点、フレイク23点、礫石器6点が出土している。壙底に密着するものはなく堆積層内での出土であることから、これらの遺物は土壤廃棄後に投げ込まれたれた二次的混入物である。また出土土器に時期差が見られないため、比較的短期間のうちに捨てられたものと思われる。以上のような内容から土壤の構築および廃棄時期は、縄文前期前葉の大木1式期に併行するものである。

SK27の南に隣接しその一部が切り合うSK41は、短径78cm、検出長径128cmの隅丸長方形を呈する土壤である。確認面からの深さは140cmを測る。平坦な底面からほぼ垂直に立ち上がる周壁は北西側でやや緩やかに広がり、断面形はコップ形となる。覆土は断面観察より4層の堆積過程が認められ、東半部ではこれを縦に切る形で土層が形成されている。また、各層とも異質な土壤が混在する人為的な埋土であることなどから考えても、柱状の構造物が存在したものと推測できる。遺物は覆土中より土器片2点、石匙完成品1点のみが出土している。時期は重複関係から判断しても、縄文前期初頭～前葉に比定される。

SK40（第5図、図版4）

調査区東端部の68—64グリッドにおいて、SK27・41より2m東側で検出された、最低でも2基の重複が考えられる土壤である。全体長径210cmを測り、平面形は大小の隅丸方形が南北につながったような形態を呈する。調査手順の都合上断面観察を行えなかったことから切り合い関係等は不明であるが、完掘状況からは周壁で段が形成される部分やピット状の掘り込みが見受けられるため、検出面では識別できなかった他の遺構が重複している可能性も指摘できる。SK40aは確認面からの深さが140cmで、その規模や断面形においてSK41と同一形態と見成される。各々の中心からの距離は2.4mを測る。遺物は覆土内よりフレイク2片が出土したのみであり、時期については明らかにできないが、形態的特徴からSK41と対になると見え、縄文前期初頭～前葉と捉えておく。



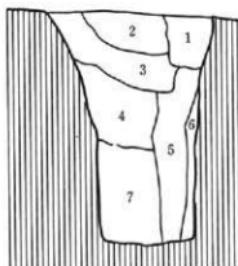
A SK27 A' 243.00



S K 27

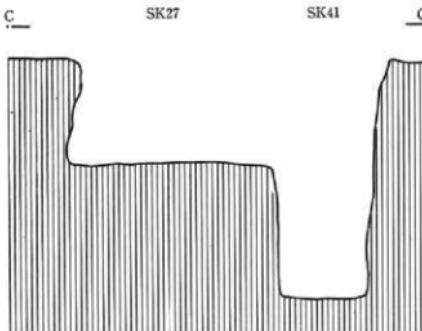
- 1 10YR2/2黒褐色砂質シルト（しまりあり）
- 2 10YR2/2黒褐色砂質シルト（炭化粘合土。石田上層を含む。）
- 3 10YR2/4黒褐色砂質シルト（土壌剖面を2層と他の間に含む。）
- 4 7.5YR2/2黒褐色砂質シルト（褐色土粘・炭化粘合土。）
- 5 7.5YR2/3黒褐色砂質シルト（炭化粘合土が半分。）
- 6 7.5YR2/3黒褐色砂質シルト（暗・褐色土粘合土半分。）
- 7 10YR2/3黒褐色砂質シルト（褐色・赤褐色土粘合土全体に含む。）

B SK41 B' 243.00



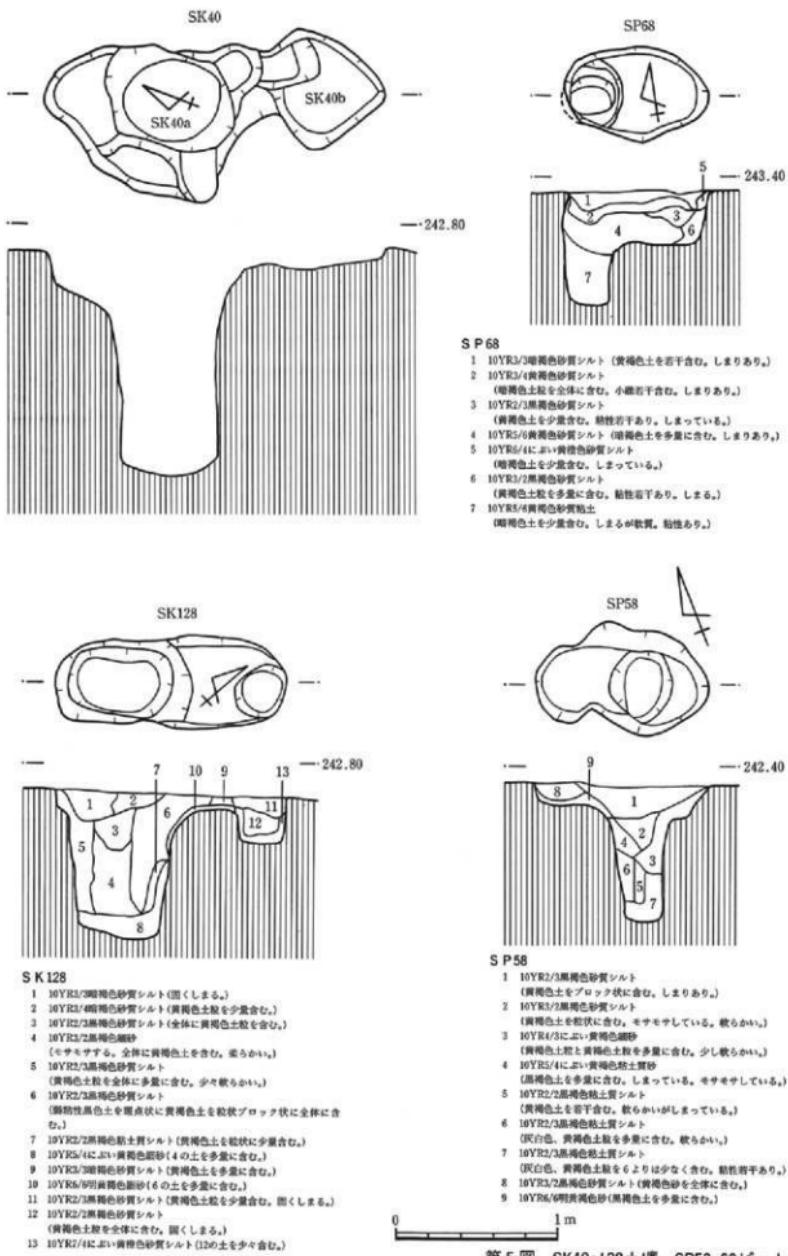
S K 41

- 1 10YR2/3黒褐色砂質シルト
（暗くしまる。山の黄褐色砂を多量に含む。）
- 2 10YR4/4褐色砂質シルト
（暗くしまる。炭化粘合土を若干含む。黄褐色砂を少量含む。）
- 3 10YR2/3黒褐色砂質シルト
（暗くしまる。灰褐色粘土層・黄褐色砂を多量に含む。炭化粘合土若干含む。）
- 4 10YR4/4褐色砂質シルト（7層に比べて粘土質、他3に同じ。）
- 5 10YR2/3黒褐色砂質シルト
（数かかい。黄褐色砂・炭化粘合土を若干含む。）
- 6 10YR2/4暗褐色粘土質砂
（灰白色粘土・黄褐色砂を粒状で全体に含む。5の土を多量に含む。）
- 7 10YR5/6黃褐色粘土質砂（灰白色粘土・黃褐色土を全体に含む。）



0 1 m

第4図 SK27・41土壤



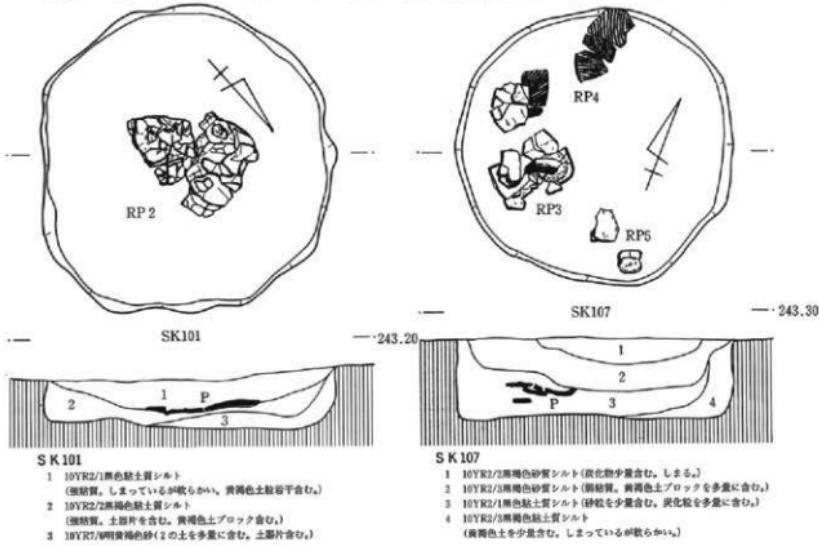
第5図 SK40・128土壤、SP58・68ピット

SK101 (第6図、図版6)

調査区西部52—63グリッドで検出された、直径125cm程の略円形を呈する土壤である。西側でL字状の浅い溝跡と交錯し、これを切る。壙底は起伏が激しい凹凸形で、確認面からの深さは16~24cmを測る。壙壁は全周において底面から急激に立ち上がっており、ほぼ垂直な掘り方をしている。黒褐色粘質土を基調とする覆土は3層に分かれ、西半部では最下層に酸化鉄を含んだ砂の流入が認められる。壙内中央部、F2層直上より埋没途中に投げ捨てられた深鉢形土器(RP2)が、押し潰された形で一個体出土している。この他にも各層より土器片が11点出土している。いずれも摩滅が著しいため復元不可能で文様の解るものも少ないが、すべて縄文時代中期末葉に属すると思われる。

SK107 (第6図、図版7)

調査区西辺50—66グリッドで検出された円形の土壤である。規模は直径115cm、検出面からの深さ34cmを測り、断面形は鏡形を呈する。ほぼ平坦な底面から立ち上がる周壁は直角的で、形態としては円筒状に掘り込んでいる。4層から成る黒褐色基調の覆土は、上半部の砂質土層と下半部の粘質土層に分かれる。F3層は炭化物を多量に含む黒色の、いわゆる生活排土であり、土層中より一括的に遺物が出土している。堆積状況はこれらがレンズ状に重なる自然堆積の様相を示す。遺物は、復元して完形となった深鉢(RP3)をはじめ土器片18点、フレイク16点、礫石器1点が壙底よりやや浮いた状態で土壤西側のF3層内から多く出土している。これらの遺物の時期は縄文中期末葉大木10式に比定される。



第6図 SK101・107土壤

SK100（第7図、図版5）

調査区西端の50・51—66グリッド、SK107の東隣りで検出された土壙である。平面形は不整な隅丸方形を呈し、南側に位置する方形で浅いSK148を切る。規模は東西・南北径とも130cm前後、深さ26cmを測り、断面形が逆台形となる。底面は樹根の腐植による窪みも含め、全体的に凹凸がある。覆土は、擾乱層が混入するなど一部に後世の掘り返しが認められるが、基本的に3層からなる。この内、遺物を含むのは土層番号3（F1層）と6（F3層）であり、壇底直上のF3層は粘土質で炭化物を多量に含む生活排土である。土壙南側では、底面よりやや浮いた状態で復元可能な深鉢（RP1）が出土している。この他には土器片8点、フレイク3点、礫石器1点があり、これら出土遺物から本壇に与えられる年代は、縄文中期末葉と考えられる。

SK112（第7図、図版8）

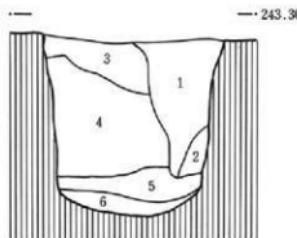
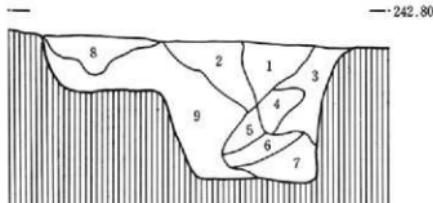
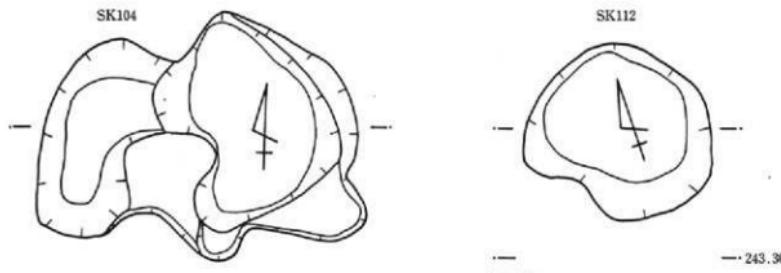
調査区西端部51—66グリッドにおいて確認された土壙である。東西径116cm、南北径108cmを測る不整な梢円形状を呈している。平坦な底面だが中央部に緩く落ち込むため、断面形はU字状となり、最深部までは105cmである。南部では比較的穏やかに周壁が立ち上がるものの、北部ではほぼ垂直な掘り込み方になる。断面観察より土壤埋没後、東側の一部では再度掘り返しが行われており、その深さは82cmを測る。覆土は4層に分かれ、粗砂を多く混入した細砂の自然堆積層である。遺物は、土器片2点とフレイク4点が最上層内から出土している。土器が細片なため文様等からの時期比定は難しいが、これらの遺物は縄文時代中期末葉～後期初頭の範疇に捉えられる。

SK29（第8図、図版8）

調査区東半部の65—64・65グリッドに位置する。検出プラン直径が約50cm、確認面からの深さ26cmを測る規模的に小形の土壙である。いわゆるフラスコ状の断面形態を呈し、壇壁中程が東西で60cmと最も広くなる。底面はほぼ平坦で、粘質土層を掘り込んでいるため壁面と同じく固くしまっている。褐色を基調とする覆土は、砂の混入や粘性的度合いにより5層に分けられる。出土した遺物は、わずかに2点のフレイクのみである。したがって、壇内遺物からは時期を明らかにできないが、東隣りに検出されたSK34より縄文前期特有の縦型石匙が出土していること、また形態の特徴および位置的関係を考慮に入れ、SK27等と同様の縄文前期前葉に比定されよう。

SK118（第8図）

調査区西半部のはば中央54—65グリッドで検出した。直径74cm程の円形を呈する土壙であるが、南辺部をSK103近世墓壙によって切られる。底面はほぼ平坦で、深さは検出面から22cmを測る。掘り方は、東側で段を形成して底面に至っている。北西側周壁はオーバーハングしたように袋状となるが、土層の断面観察から堆積途中で壁面が崩壊したものと判断される。黒褐色粘質土の覆土は基本的に2層に分かれ、上層では粗砂を全体に混入する。本壇より出土した遺物は、石匙完成品が1点だけである。出土土器がないため時期については特定できないが、石匙の特徴から縄文時代前期の所産と考えられる。



SK104

- 1 10YR2/3暗褐色細砂(にほい黄褐色砂を多量に含む。少々軟らかい。)
- 2 10YR2/3暗褐色砂質シルト(1の砂と少量含む。)
- 3 10YR2/3暗褐色砂質シルト(炭化鉄を少量含む。少々軟らかい。)
- 4 10YR6/4C(にほい)黄褐色細砂(3の土を少量含む。)
- 5 10YR2/3暗褐色砂質シルト(4の砂を少量含む。)
- 6 10YR6/4C(にほい)黄褐色細砂(4の砂を多量に含む。少々粘性あり。)
- 7 10YR2/4褐色粘土質砂(若干粘土質を含む。3の土と4の土を多量に含む。)
- 8 10YR2/2褐色砂質シルト(堅土質。しまっているが軟らかい。)
- 9 7.5YR4/6褐色粗砂(若干無機色土を混入している。)

SK112

- 1 10YR2/3暗褐色細砂(炭化鉄を少量含む。固くしまる。)
- 2 10YR2/4褐色細砂(固くしまる。)
- 3 10YR2/3暗褐色細砂(炭化鉄を少量含む。)
- 4 10YR2/3暗褐色細砂(固くしまる。)
- 5 10YR5/6無機色細砂(硬っぽい。軟らかいい。)
- 6 10YR2/2無機色細砂(やや軟らかい。)

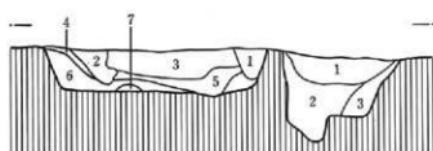
SK100

- 1 10YR2/3黒褐色粘土質シルト(軟らかい黄褐色粘土粒を少量含む。)
- 2 10YR2/2黒褐色砂質シルト(しまりなく軟らかい複乱層。黄褐色粘土粒少量含む。炭粒若干含む。)
- 3 10YR2/2黒褐色粘土質シルト(炭粒多量含む。土層片を含む。)
- 4 10YR2/3黒褐色砂質シルト(黄褐色土粒を少量に含む。しまっているが軟らかい。)
- 5 10YR2/2黒褐色粘土質シルト(3の土を多量に含む。しまっている。)
- 6 10YR2/2黒褐色粘土質シルト(強粘質、土層片多量に含む。炭化鉄を多量に含む。)
- 7 10YR5/6黄褐色細砂(若干粘性あり。6の土を混入する。)

SK143

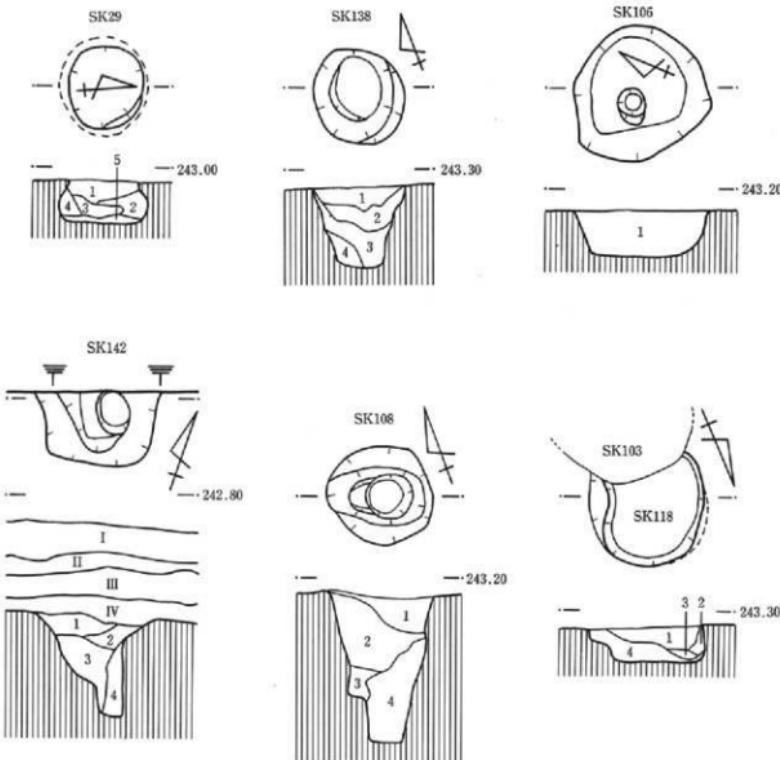
- 1 10YR2/3暗褐色砂質シルト(固くしまる。)
- 2 10YR2/2黒褐色粘土質シルト(黄褐色土を多量に含む。やや軟らかいがしまる。)
- 3 10YR2/3暗褐色粘土質シルト(黄褐色土ブロックを含む。固くしまる。)

— 243.30 —



0 1m

第7図 SK100・104・112・143土壤



0 1m

第8図 SK29・106・108・118・138・142土壤

2 墓 墳（第3・9図、図版10）

今回検出した墓墳は、すべて江戸時代以降の近世から現代に属するものである。調査区内で確認された数は17基であり、その分布状況については前述した。ここでは、これらの形態や規模等の概要について、以下に一括して記述するに留める。

①形態：平面形が隅丸の長方形または方形を呈する。断面形は逆台形状を成し、底面が平坦である。②規模：最も西に位置するSK127は、小動物の埋葬穴であるためこれを除くと、長径105～200cm、短径135～85cm、深さ60～120cmの範囲で、容積的に最大のものはSK98、最小なのがSK57である。③覆土：人為的な埋土であり擾乱層である。腐植もしくはほぼ粘土化した木片を含む層がある。SK42のF1～4層では、中央部が後に陥没した様相が認められる。④遺物：墓墳に関する遺物を遺存するのはSK32のみである。墳底密着で、寛永通寶4枚と櫛の一部が出土している。

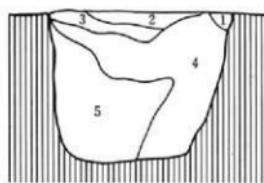
また調査区東端に位置するSK36は、長径110cmを測る梢円形で深さ16cmの皿形を呈する土壙であるが、覆土内より寛永通寶6枚のいわゆる「六文銭」が出土していることから、これら墓墳に付随するものと考えられる。

3 経 塚（第10図、図版11）

経塚(SM1)は、遺跡南西端の50・51—54・55グリッド内に存在する。現在の県道沿いで位置することで、道路工事の際にその西側一部が削られている他は、ほぼ原形を留める。平面形は隅丸方形と考えられるが、西側が壊されているため現状では隅丸の三角形を呈する。244.40mの等高線上をマウンドの裾と捉え、その大きさは残存検出長が南北5.5m、周辺部との比高差70cm余を測る。調査は終了日の5日前に手掛けたこともあり、時間的な制約から現況の地形測量を行った後、マウンドの中央部を通る幅1mのトレンチを道路に平行させた南北方向に設定して掘り下げた。表土下75cm、マウンド中央部や西側寄りで幅1.7mの範囲に、径10cm内外の扁平な円錐の積石層が検出された。積石層は崩壊が激しかためこれを採集しながら掘り進めたが、底面には至らず確認できた高さは150cmである。

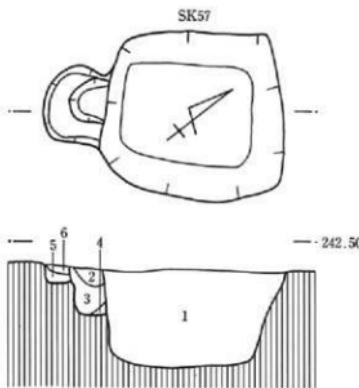
土層観察の結果、旧表土であるI層上面より土壤状の穴を掘り込んで経石を積み重ね、これに掘った土(②)を被せ、さらに周囲から掘り上げた黒褐色土(①)で小山状に覆う「封土」を行っていることが解る。また、構築当時の塚の周辺部は、掘り下げられたことにより一段低い周溝状の地形を成していたことが窺える。

扁平な疊石には、一個毎に一字づつ經典の文句が書き写され、これをまとめて埋納した塚であることから「一字一石経塚」とも呼ばれる。このような疊石経塚には、本遺構のように土壤を掘って直接あるいは陶壺や木製容器等に入れ埋納して地上に封土を行う例と、地面に経石を円錐状に積み上げる方法が認められている。埋納された経石の数は膨大で、土層断面の崩壊もあり全てを持ち帰ることができなかつた。他に封土・覆土内から遺物は出土していない。以上の内容から、疊石経塚としての性格が判明したが、年代を断定することはできない。したがつてここでは、第1次調査で検出された三段塚に比例させ、江戸時代前半の構築と捉えておくことにする。



SK32

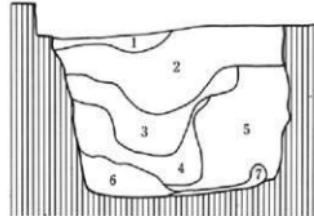
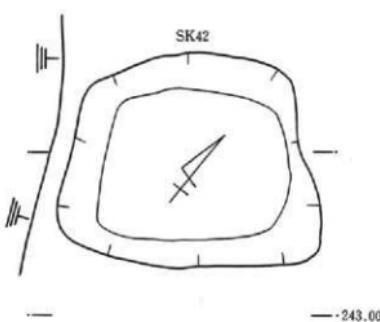
- 1 10YR3/4暗褐色砂質シルト
- 2 10YR3/3暗褐色砂質シルト(固くしまる。灰白色ブロック若干含む。)
- 3 10YR3/3暗褐色砂質シルト
(固くしまる。灰白色土塊を多量に含む。)
- 4 10YR5/6黄褐色粘土
(やや軟らかい。灰白色粘土ブロック・暗褐色土塊を多量に含む土。)
- 5 10YR3/3暗褐色砂質粘土
(軟らかい。灰白色粘土粘土・黄褐色粘土粘土を全体に多量に含む。)



SK57

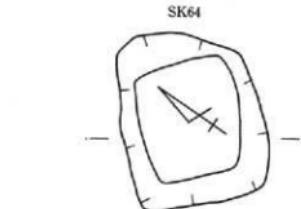
- 1 10YR2/3暗褐色砂質シルト
(モザイクしている。黄褐色粘土ブロックを多量に含む。)
- 2 10YR3/3暗褐色砂質シルト(固くしまる。黄褐色土塊を全体に含む。)
- 3 10YR2/3暗褐色粘土質砂(黄褐色土塊を若干含む。)
- 4 10YR5/6黄褐色粘土質砂(3の土を多量に含む。ボロボロしている。)
- 5 10YR2/3暗褐色砂質シルト(固くしまる。黄褐色土を少量含む。)
- 6 10YR5/6黄褐色細砂(固くしまる。5の土を多量に含む。)

0 1m

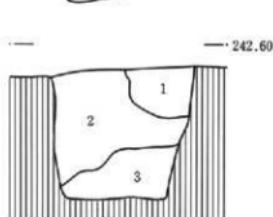


SK42

- 1 10YR2/3暗褐色砂質シルト(しまっている。黄褐色紺、炭酸岩若干含む。)
- 2 10YR6/4に5.黄褐色砂
- 3 10YR6/4に5.黄褐色砂
(暗褐色土、灰白色土粘土を多量に含む。灰白色粘土若干含む。)
- 4 10YR7/3に5.黄褐色砂(3と同じ泥り物、湿っていて軟らかい。)
- 5 10YR6/3に5.黄褐色砂
(しまっている。灰白色粘土粘土・褐色粘土粘土を少量含む。)
- 6 10YR5/4に5.黄褐色砂(重っている。軟らかい。7の土を少量含む。)
- 7 5YR5/7暗褐色細砂(重っていて軟らかい。人骨出土。)

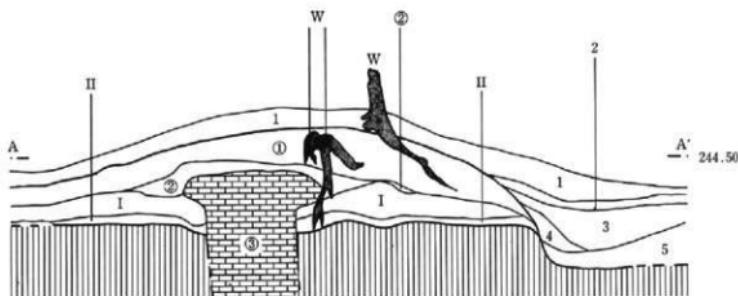
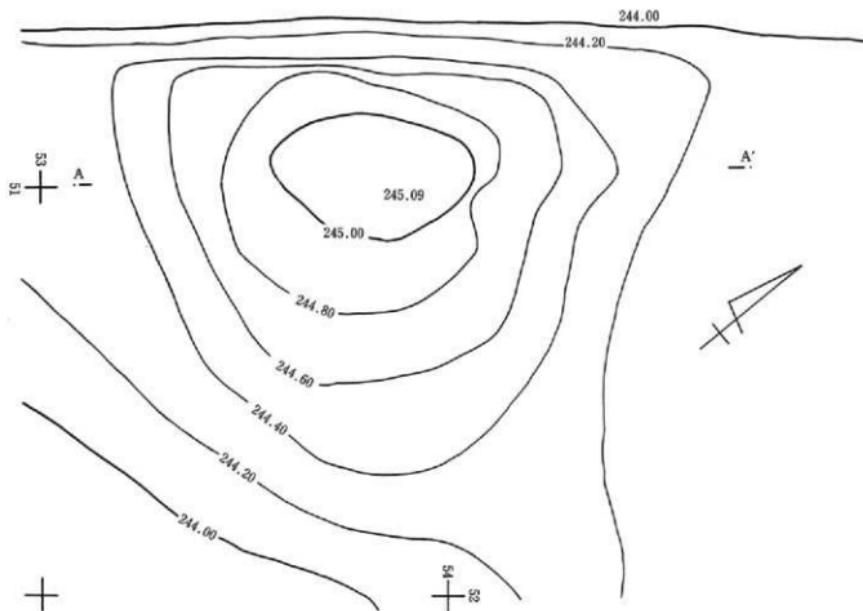


SK64



SK64

- 1 10YR2/1灰白色粘土(黄褐色土・黒褐色土を多量に含む。しまっている。)
- 2 10YR2/3暗褐色砂質シルト(黄褐色土を板状・ブロック状に多量に含む。)
- 3 10YR2/3暗褐色砂質シルト(無色土・黄褐色土が混在。しまりなく軟らかい。湿っていて粘性弱。木片が少々入っている。)



I 10YR2/2 黄褐色粘土質砂 (表示よりも黄色が強い。田舎土上方に)
②(の土を若干含む。しまっていいるが軟らかい。)

II 10YR2/3 黄褐色粘土質砂 (地山断砂)

1 7.3YR3/2 黑褐色砂質シルト (土、現代陶器片、ガラス、ゴム等含む。)

2 7.3YR3/3 黑褐色砂質シルト

(②の土を少量混入する。根が多量に入る。)

3 10YR2/2 黄褐色粘土質砂 (黄褐色土の粒を少量含む。)

4 10YR2/2 黄褐色粘土質砂 (黄褐色土の粒を多量に含む。)

5 10YR2/2 黄褐色粘土質砂 (軟らかい。)

① 10YR2/2 黄褐色砂質シルト

(しまりはあるが軟らかい。根による埋没をかなり受けける。)

② 10YR6/4 例 黄褐色粘土質砂 (根の構成土。1の土を多量に含む。)

③ 破石層 (1と2と地山土を多量に含む。)

0 2m

第10図 SM I 経塚

表 I 造構計測表

単位: cm

登録番号	検出地区	長軸長	短軸長	深さ	出土遺物	備考
21	64-65-64-65	284	190	27	フレイク5点	10YR3/3暗褐色砂質シルト。灰色粘土を含む。擾乱層。
25	55-63	150	104	12	フレイク19点	10YR3/4暗褐色砂質シルト。灰色粘土を含む。近世墓。
29	65-64-65	390	260	27	フレイク2点	10YR3/3暗褐色砂質シルト。炭化物を含む。フラスコ状。
30	64-63-64	300	180	28	フレイク2点	10YR3/3暗褐色砂質シルト。褐色砂を含む。擾乱層。
31	63-63-64	156	84	27		
35	65-64	94	58	42		10YR3/3暗褐色砂質シルト。黄褐色砂を多量に含む。
36	67-62	110	82	16	フレイク9点、瓦通宝1点	10YR2/2暗褐色砂質シルト。炭化物を含む。
37	67-64	13	16	16	土器1点	
39	62-64	12	10	30	土器1点	
43	62-63-64-65	418	330	42	土器1点、フレイク26点	
44	61-63	(216)	(106)	(69)	フレイク6点	
45	59-65	121	83	31		7.5YR3/2暗褐色砂質シルト。黄褐色砂を含む。近世墓。
47	60-61-64	436	400	37	土器3点、フレイク9点	
49	60-63	84	65	34	フレイク1点	10YR2/2暗褐色砂質シルト。黄褐色土を含む。擾乱層。
51	59-65	45	35	39	土器4点、フレイク3点	10YR2/2暗褐色砂質シルト。
52	59-64	40	35	43	フレイク1点	10YR2/2暗褐色砂質シルト。
53	60-64	27	23	24	土器1点、フレイク1点	10YR2/3暗褐色砂質シルト。燒土粒、炭化物を含む。
54	59-64	37	32	30		10YR2/3暗褐色砂質シルト。
56	58-63	132	98	110	フレイク8点	
62	57-63	56	45	25	土器1点、フレイク1点	10YR3/3暗褐色砂質シルト。
65	59-64	65	30	48		10YR3/3暗褐色砂質シルト。粘性、しまり有り。
66	59-64	55	35	42	土器11点、フレイク1点	10YR3/3暗褐色砂質シルト。
67	59-63	52	50	35		7.5YR3/2暗褐色砂質シルト。
69	59-64	53	30	48		7.5YR3/2暗褐色砂質シルト。
70	59-64	57	30	44		10YR3/3暗褐色砂質シルト。
71	60-63	31	30	23	フレイク2点	10YR3/3暗褐色砂質シルト。黄褐色土を多量に含む。
72	59-64	40	20	40		10YR2/3暗褐色砂質シルト。粘性、しまり有り。
73	60-63	56	34	5	土器1点	
74	57-64	30	29	29		10YR2/3暗褐色砂質シルト。
75	58-64	47	38	29	土器1点、フレイク2点	10YR2/3暗褐色砂質シルト。黄褐色土を含む。
77	58-64	74	31	29	フレイク1点	7.5YR3/2暗褐色砂質シルト。難を含む。
78	57-64	46	37	17	フレイク1点	10YR2/2暗褐色砂質シルト。
79	58-63	27	25	17		10YR3/3暗褐色砂質シルト。
80	58-63	30	26	42		7.5YR3/2暗褐色砂質シルト。
82	58-63	29	27	30		10YR3/3暗褐色砂質シルト。
83	58-64	42	32	11		10YR2/3暗褐色砂質シルト。
84	58-63	33	23	41		10YR2/2暗褐色粘土質砂。難を含む。
85	58-63	47	24	42		10YR2/2暗褐色粘土質砂。
88	58-65	39	29	42	フレイク2点	10YR2/2暗褐色粘土質シルト。
105	49-66	(84)	(48)	(82)	土器11点、フレイク2点	
109	50-65	160	86	62	土器1点、フレイク2点	
114	55-63-64	94	90	38	土器3点、フレイク4点	7.5YR3/2暗褐色砂質シルト。
125	52-65	122	116	111	フレイク1点	
126	52-65	13	12	29	土器1点、フレイク3点	10YR2/3暗褐色砂質シルト。
127	53-66	116	88	36		7.5YR3/2暗褐色砂質シルト。
137	51-65	36	35	105	フレイク6点	10YR2/3暗褐色砂質シルト。
139	52-65	65	56	63		10YR2/3暗褐色砂質シルト。
143	51-66	70	48	51	土器1点、フレイク2点	10YR3/3暗褐色砂質シルト。
144	51-66	84	53	129		土器1点、フレイク4点

IV 出土遺物

1 繩文土器

包含層・遺構内出土の土器片を一括して分類し、第Ⅰ群：縄文前期前葉、第Ⅱ群：縄文中期末葉に大別し、第Ⅲ群では中期末葉～後期初頭に属する粗製土器を一括して扱った。

第Ⅰ群土器（第11図1～10、図版13）

末端ループ文・組紐文などが地文に用いられ、一見して胎土に纖維を含むものを一括する。器種は平縁もしくは波状口縁を呈する深鉢形土器である。

1類 磨消ループ文の類（1）で、波状口縁を呈する口縁部文様帶にループ文が数段横位に施され、その間に三角形や菱形の無文（磨消）部分が作り出される。器厚8mm前後、口唇が平縁で内面側には丁寧なミガキ調整を施している。

2類 ループ文の類（2～5）で、多くは口縁部に末端が重層して数段横位に回転施文され、口縁部文様帶的な効果を作出するものである。5は原体末端の環がくずれて回転しているため、組紐文様に近い変形ループ文である。

3類 組紐回転文の類（6～10）で、r・1各2本を4本丸編みにして1組の原体を作り、これを横位回転させて施文したものが多い。10には口縁と体部を画すと考えられる半截竹管状の平行沈線が加えられる。

第Ⅱ群土器（第11図15～25・29、図版13・14）

隆・沈線によって囲んだ文様内部に地文を充填する土器群である。文様はS字状・U字状・横円文等により表現され、地文として斜縄文や撚糸文が施される。器種は平縁の深鉢形または浅鉢形土器で、口縁部形態が外傾もしくは内弯する器形となる。

1類 沈線により文様を描出するもの（15～17・22・23・29）。15～17は頸部にやや太めの沈線を一条巡らして体部と口縁を区画し、口縁部にミガキ調整を施した後に斜縄文が付される。22は横円文状の文様内部に刺突文が充填される。23も同様であるが、沈線を引いた後にミガキ調整が加えられる。29は幅の狭い沈線内部に撚糸文が付される。

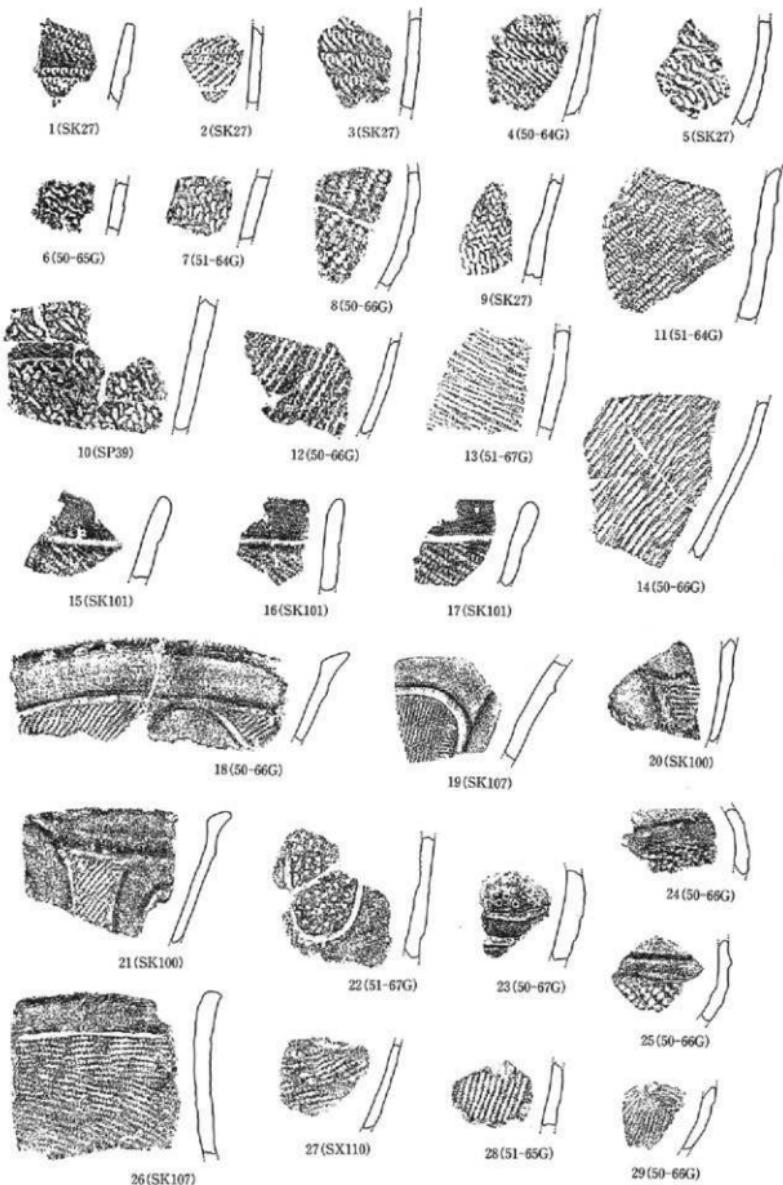
2類 隆線により文様を描出するもの（24・25）。裾広がりで頂部に稜を持つ隆線で縁取りされ、地文として節の大きい単節縊文が施される。

3類 沈線と隆線の組み合わせた文様を描出するもの（18～21）。これらの施文技法は、施文部分の研磨→隆線による文様表現→文様内部（外）部の縊文による充填→沈線による再調整という手順で成される。18は文様の内側が無文で外側に地文を充填し、後に口縁部はミガキによって帯状に磨消調整されたものである。

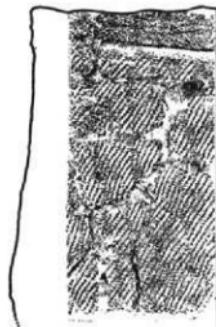
第Ⅲ群土器（第11・12図、図版12～14）

文様帶を持たず地文のみが施文されるいわゆる粗製土器を扱う。器種は平縁で器高の高い深鉢が多く、胎土には石英等の砂粒を含んでいる。

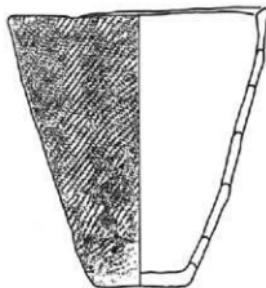
1類 口縁部に無文帶を有する（26・30・31）。30は脛張りの器形で腹部中程に最大径を持ち、直立気味の口縁部が緩く外反する形態である。頸部に稜線を巡らし、後に横走



第11図 縄文土器(1)



30 (SK107, RP4)



32 (SK107, RP3)



31 (SK100, RP1)



33 (SK107, RP5)



34 (SK107)

0 10cm

する斜縄文が施される。口縁部が内弯する31は、肩部で最大径を測る長胴の深鉢である。地文の斜縄文を付した後、口縁部のミガキ調整によって磨消が行われている。

2類 全面縄文を有するもの(32)で、底部から外傾しながら口縁に至る平縁の深鉢である。口唇部が肥厚し内側に傾斜する中期末葉における特徴的な形態を呈し、口唇直下よりRL単節斜縄文が横位回転で施文される。

3類 体部破片(11~14・27・28)や下半部資料(33・34)を一括する。11はLR縦位斜縄文、12・13は撻糸文、14は別の撻糸が付加される異条縄文、27はLR単節の不規則な縦位回転文、28はRL斜縄文が横位に施される。33は大ぶりな深鉢形、34は鉢形土器の下半部で、いざれも単節斜縄文で覆われている。

2 石 器

実測図示したものを中心として、器種毎に形態的特徴から分類を行いその概要を記す。

石 鐸 (第13図1・2、図版14)

基部に抉り込みの入る形態で、1は半円形の深い抉り込みで形状が縦長であるのに対し、2は浅いわずかな抉り込みで平基に近く、形状は三角形になる。側縁の形態は双方とも左右対称になる。加工は両面に丁寧な押圧剥離が施され、2は周辺加工で形を仕上げている。

両尖匕首 (第13図3)

石材は黒曜石で、全長46mm、抉入部幅7mmの小形なものである。両先端が三角形の槍先状となり、両面とも入念な調整加工により仕上げられる。形態的には石鎌の基部に茎を持つ、いわゆる有茎鎌2点を基部で接合させたような形状である。

尖頭器 (第13図4~6、図版14)

両面加工もしくは片面加工によって尖った先端部を作出した石器を尖頭器とした。両面加工が施され平面形が三角形になる4は、石鎌に類似する小形の尖頭器である。両面側とも全面が調整加工面で覆われる。5は中央から基部側が折損しているが、6と共に平面形が木葉形を呈し全長10cm未満、最大幅30mm以上の幅広な尖頭器である。これらは、素材の主要剥離面(裏面)側では周辺部のみに浅い加工が認められる。

石 匙 (第13~14図7~19、図版14~15)

相対する2つのノッチを入れることによって、作出されたつまみを持つ石器を石匙とした。全部で17点が出土しており、全てつまみを上方に置いた時に側縁が刃部となる縦長のもので、左右が非対称である。これらは、側縁の形態により以下のように分類される。

I類：右側縁が直線状をなし左側縁が「く」の字状に曲がるもの(7~10)。

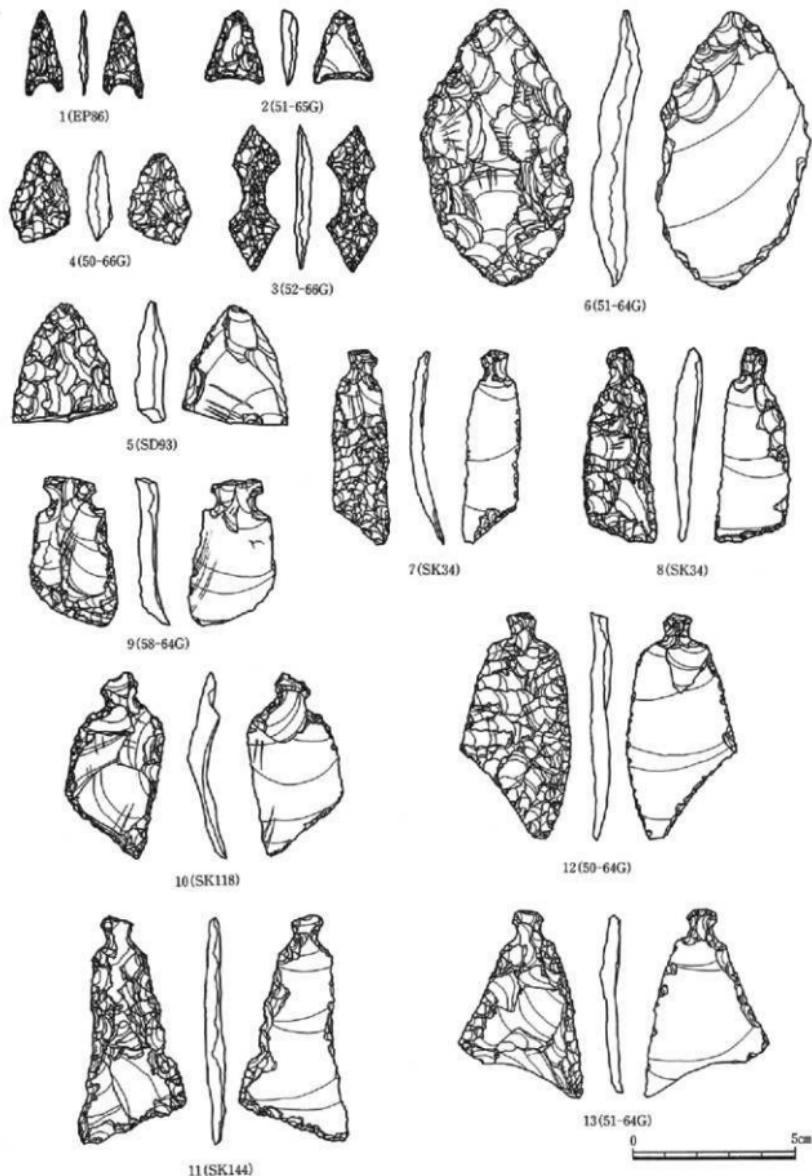
II類：左側縁が凸弧を描き、右側縁が「く」の字状に曲がるもの(11)。

III類：右側縁が凸弧を描き、左側縁が「く」の字状に曲がるもの(12~18)。

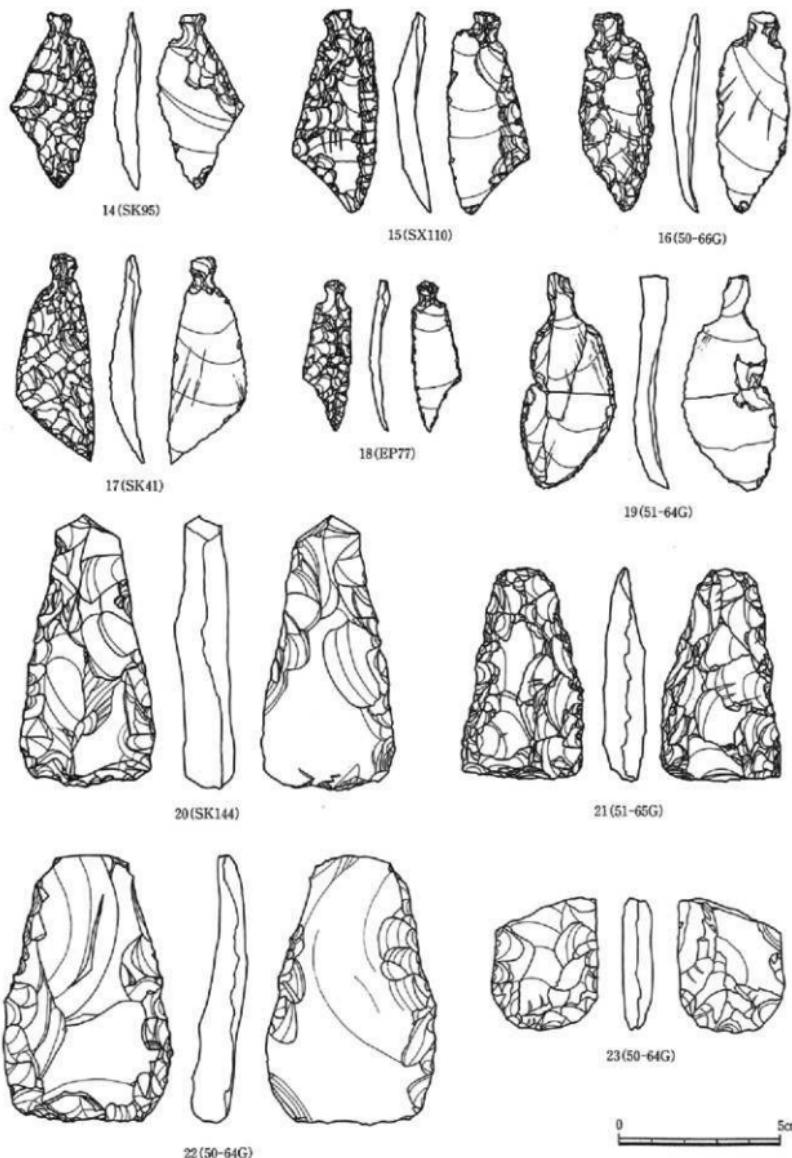
IV類：両側縁が凸弧状となり、刃部先端が丸味を有するもの(19)。

石 箕 (第14~15図20~26、図版15)

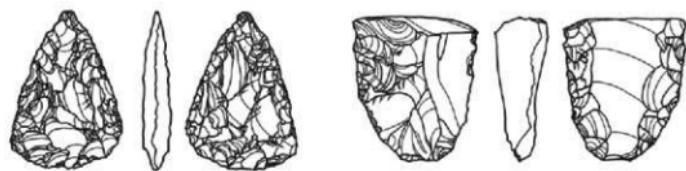
素材となった剝片の背面と主要剥離面の両面に加工され、その長軸の末端が刃部と考えられる石器を石箕とした。図示した他にも2点出土している。これらは、平面的な形や刃



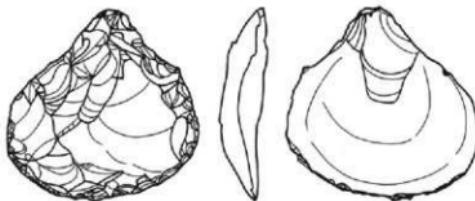
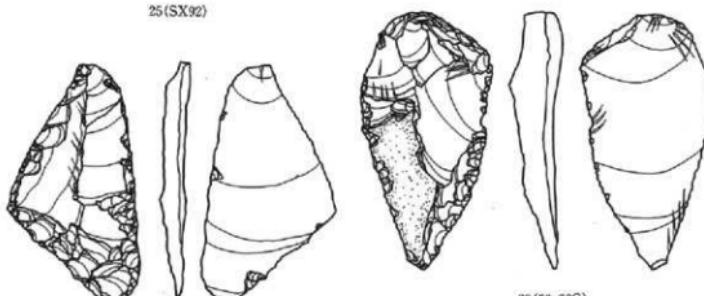
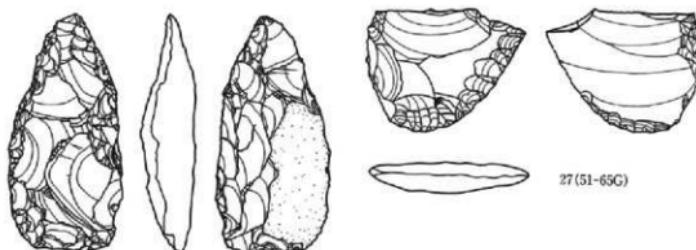
第13図 石器(I)



第14図 石器(2)



26 (51-66G)



0 5cm

第15図 石器(3)

部の形態、加工部位の相異により以下のように分類される。

I類：撥形で刃部が片刃状のもの。次のように細分される。

- a : 両面加工で調整が素材のほぼ全体におよぶもの(21)。刃部は直線状となる。
- b : 素材の背面側はほぼ全面に調整加工が施されるが、主要剝離面側は側縁部だけが周辺加工されるもの(20)。刃部は直線的で先端部に浅い加工が認められる。
- c : 周辺部のみに加工が施され、刃部の加工が背面側のみに認められるもの(22)。

II類：撥形で刃部が両刃状となるもの。

- a : 両面加工となり、素材の両面はほぼ全面が調整加工で覆われるもの(24)。刃部は丸味を帯びる。
- b : 両面加工であるが、片面に自然面を残し刃部が直線状となるもの(25)。

III類：短冊形となり得るもので、刃部が片刃状のもの。これらの刃部は丸味を帯びる。

- a : 両面加工となり、調整が素材のほぼ中央部まで及ぶもの(23)。

- b : 両面加工であるが、主要隔離面側は側縁部だけに周辺加工が施されるもの(26)。

搔 器 (第15図30、図版15)

急角度の調整加工によって刃部を作出した石器を搔器とした。素材は縦長剝片のほか横長剝片も用いられ、いずれの場合もその長軸端には必ず刃部を作出している。30は素材の一縁辺を除く三縁辺が刃部となり得るものであり、素材の打面側を基部としている。

削 器 (第15図27~29、図版15)

剝片の縁辺に連続的に調整加工を施して刃部を作出した石器を削器とした。不定形であり、素材や刃部の作出方法、その位置関係の相異で分類できる。

I類：横長剝片を素材とし、両面加工によって作出された刃部と片面加工により作出された刃部を合わせ持つもの(27)。素材の末端が両面加工、両側縁が片面加工の刃部となるものである。

II類：縦長剝片を素材とし、片面加工によって刃部が作出されるもの。

- a : 素材の三縁辺が刃部となるもの(28)。三縁辺とも背面側に加工が施される。

- b : 背面側の両側縁に加工が施され、末端が収斂するもの(29)。

敲 石 (第16図32、図版16)

扁平な長方形の砾の端部に敲打痕を持つものである。ハンマーとして使用されたものと考えられる。32は自然石を利用したもので、石材は花崗岩である。

凹 石 (第16図33~38、図版16)

椭円形や円形状の河原石の平坦面に敲打によると考えられる凹痕を有するもので、そのほとんどが磨痕を合わせ持つ。石材は安山岩が多いが、花崗岩や砂岩もある。図示した中で34は砾の一面に、37・38は二面、33・35・36は三面に凹痕を持つものである。

石 皿 (第17図、図版17)

SK27土壤F 2層より1点出土している。扁平で大形の安山岩の片面に台形状ないし円形の窪んだ研磨面を有するもので、背面は平らで数条の敲打痕がある。



32(SK107)



33(SK144)



34(EP87)



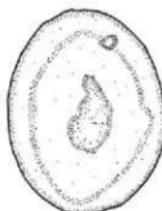
35(EP75)



36(S0-64G)



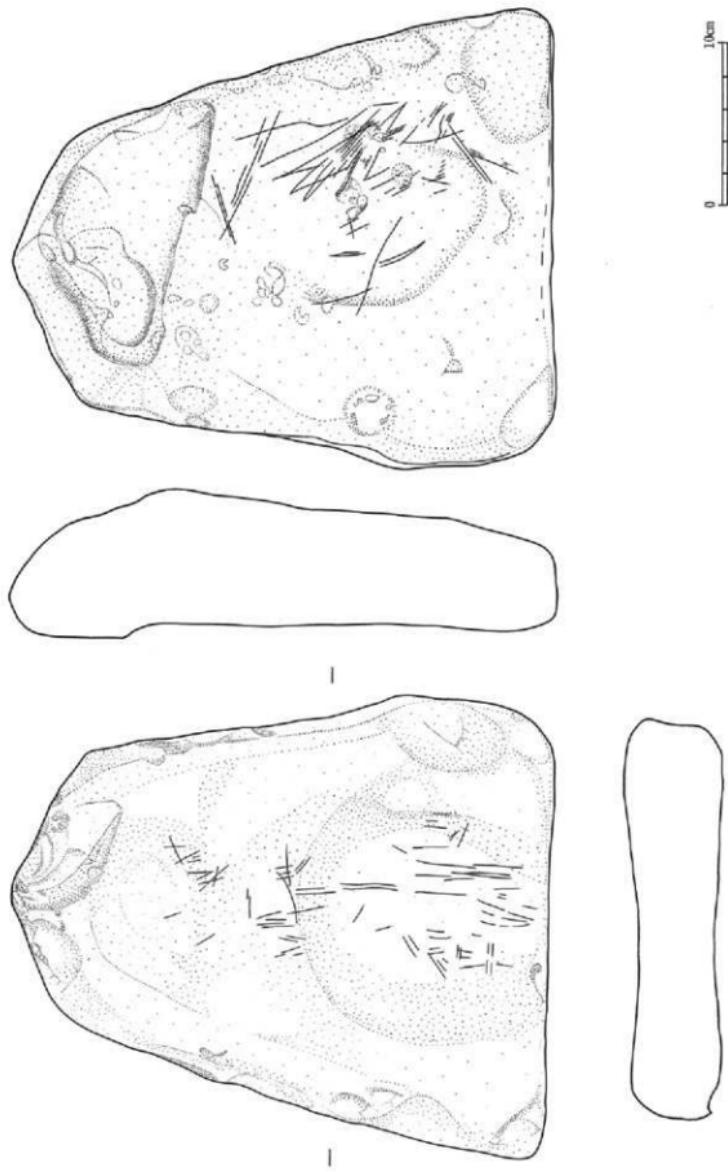
37(51-65G)



38(SK100)



第16図 敲石・凹石



第17図 石皿

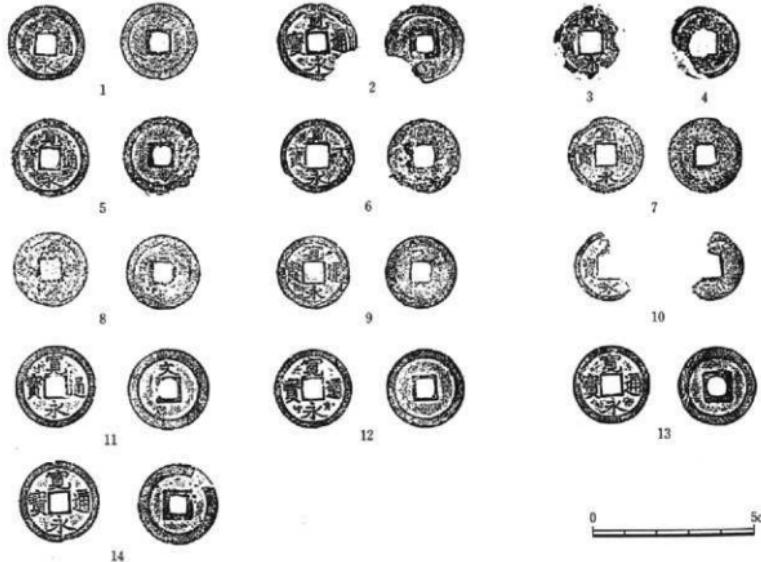
3 古銭 (第18図、図版17)

13枚出土しているが全て近世銭の寛永通寶であり、3は4枚が密着した状態である。これらは、SK32等の墓壙およびSK36土壤より一括的に出土したものである。径や周郭幅の大小、書体の相異などから何種類かのものが確認できる。

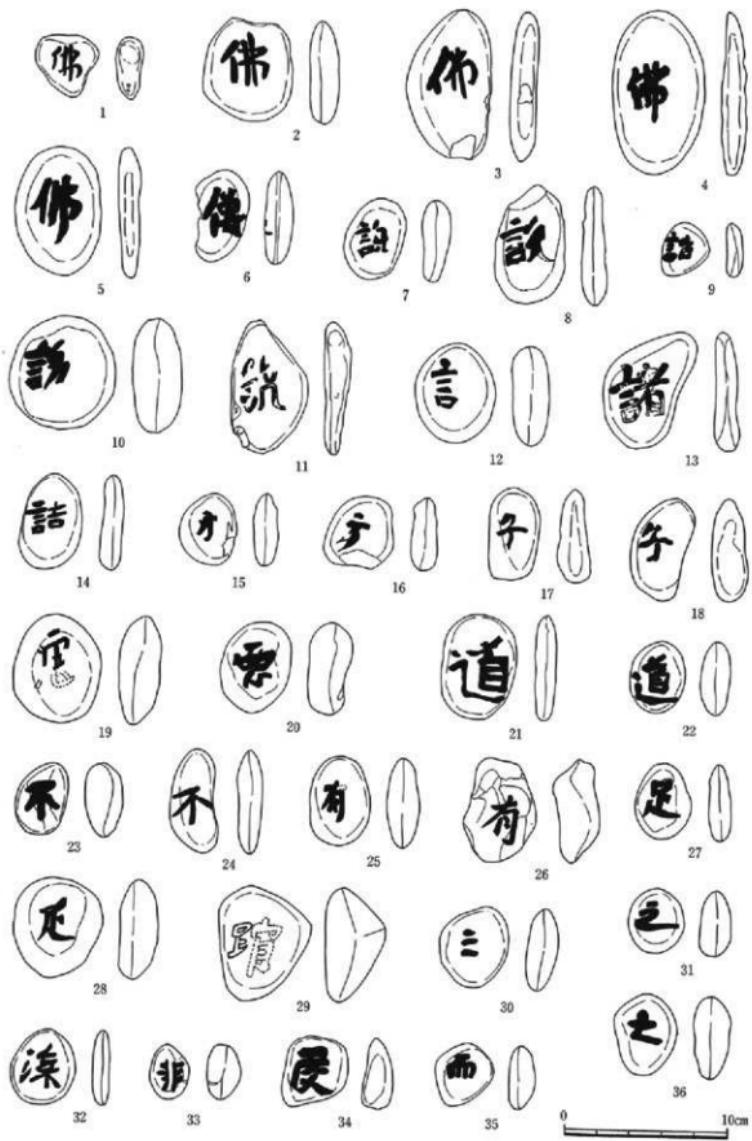
4 経石 (第19~20図、図版18~20、表2)

SM1経塚より採取した積石は整理箱にして6箱、およそ200個の経石であり、そのほとんど全てに墨痕または赤色顔料の塗布が認められた。これらは、礫石の平滑な面に赤色顔料で直接朱書きしたものが大部分を占め、他に赤色顔料を塗布した後から墨書きを施したものが数点見受けられる。この中で字体が確認できたのは実測図示した73個であるが、部分的に朱や墨が剥げ落ちているため判読し難いものも多い。経石に使用された礫石は大半が扁平な円錐であり、大きさは最大値で縦11.6cm・横8.1cm・厚さ3.7cm、最小値でそれぞれ3.2cm・2.4cm・0.8cmとかなりの差異がある。

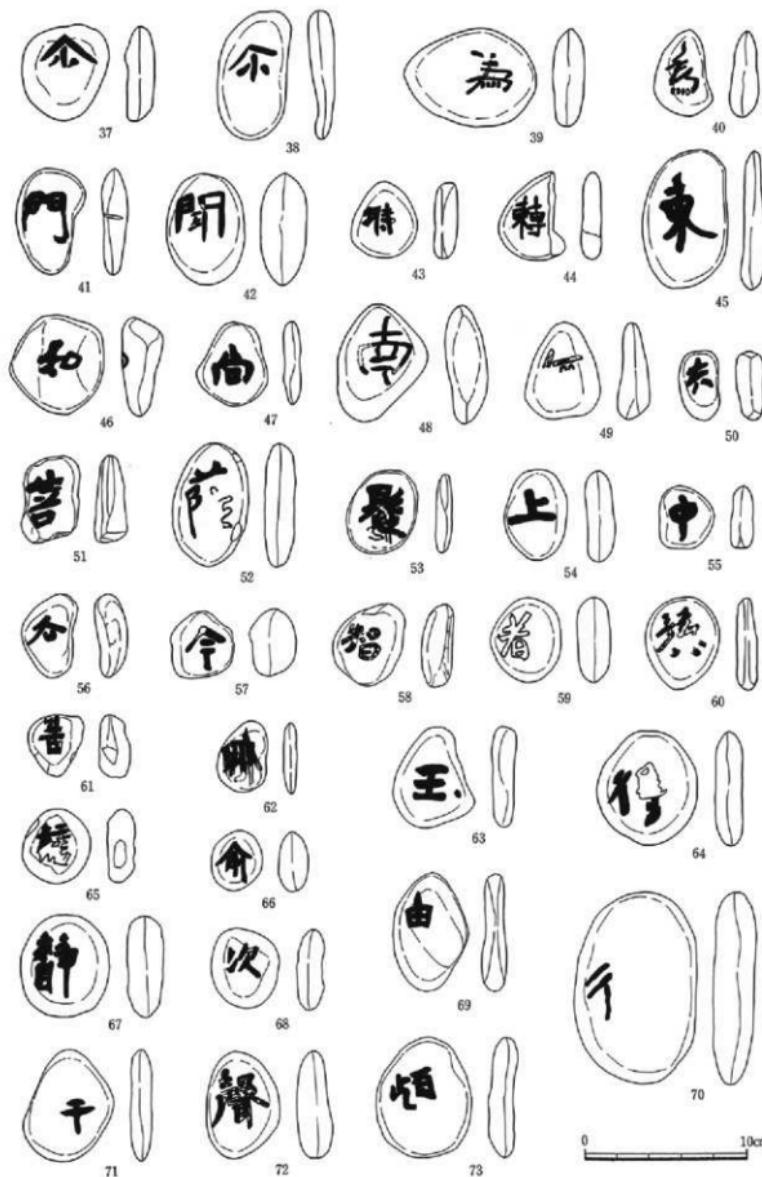
墨書きの書体は楷書もしくは行書の類が多いが、中には相當くずされているものもある。一字一石經の典拠は、一般的には法華經の例が多いとされている。墨書きされた文字で判読できたものは51字を数え、「佛」(5点)、「說」(4点)、「方」・「子」・「惡」・「道」・「不」・「有」・「足」・「之」・「余」・「為」(各2点)などがある。これらの同じ文字や、他の文字についても筆使いやくずし方に差異があり、複数の人物によって書かれた可能性が考えられる。



第18図 古銭



第19図 経石(I)



0 10cm

第20図 経石(2)

表2 経石観察表

単位: %

No	文字	法量			備考	No	文字	法量			備考
		タテ	ヨコ	厚さ				タテ	ヨコ	厚さ	
1	佛	38	38	17	朱書	38	余	76	45	16	朱書
1	佛	62	55	17	朱書	39	為	59	81	19	朱書
3	佛	91	52	16	墨書(赤色顔料塗布)	40	為	52	37	17	朱書
4	佛	99	57	16	墨書(赤色顔料塗布)	41	門	64	42	15	朱書
5	佛	52	80	15	朱書	42	聞	68	48	28	朱書
6	僧カ	56	33	17	朱書(赤色顔料塗布)	43	時カ	46	40	14	朱書
7	説	50	39	18	朱書	44	轉	53	40	12	朱書
8	説	73	43	16	朱書	45	東	84	52	15	朱書
9	話	33	29	11	朱書	46	和	60	57	26	朱書
10	説	69	65	30	朱書	47	尚	51	43	10	朱書
11	説カ	81	47	17	朱書	48	南	72	55	27	朱書
12	言	61	50	23	朱書	49	無カ	58	38	15	不明(赤色顔料塗布)
13	諸	110	57	26	朱書	50	共カ	43	25	17	朱書
14	詰	58	38	15	朱書	51	菩	51	37	20	朱書
15	方	44	35	15	墨書(赤色顔料塗布)	52	薩カ	74	47	18	朱書
16	方	44	43	17	朱書	53	斐カ	47	49	10	朱書
17	子	57	32	21	朱書	54	上	54	38	20	朱書
18	子	62	38	22	不明(赤色顔料塗布)	55	中	38	33	14	朱書
19	悪カ	66	54	26	朱書	56	□	51	33	18	朱書
20	悪	55	43	27	朱書	57	今	41	39	28	墨書(赤色顔料塗布)
21	道	65	46	13	朱書	58	智	51	44	19	朱書
22	道	34	44	18	朱書	59	者	52	43	21	不明(赤色顔料塗布)
23	不	44	32	24	朱書	60	加	57	46	13	朱書
24	不	63	30	17	朱書	61	苦カ	37	34	20	朱書
25	有	54	37	20	朱書	62	□	30	43	8	朱書
26	有	63	45	29	朱書	63	玉	60	40	16	朱書
27	足	46	34	14	朱書	64	得カ	70	61	17	不明(赤色顔料塗布)
28	足	52	54	24	朱書	65	□	46	41	17	朱書
29	匁	71	57	37	朱書	66	俞	32	37	18	朱書
30	三	50	42	19	朱書	67	静	61	54	22	朱書
31	之	40	34	19	朱書	68	次	48	42	18	朱書
32	之	39	49	22	朱書	69	由	71	46	15	朱書
33	凜カ	45	39	10	朱書	70	彳	116	74	27	朱書
34	非	33	24	21	朱書	71	千	69	43	13	朱書
35	□	43	40	18	墨書(赤色顔料塗布)	72	聲カ	66	44	22	朱書
36	面	38	36	16	朱書	73	頻カ	74	58	18	朱書
37	余	57	53	18	朱書						

V まとめと考察

郡之神遺跡は、飯豊町を流れる白川中流域左岸の河岸段丘東端部に立地する、縄文時代前期前葉と中期末～後期にかけての集落跡である。昭和52年には、県教育委員会が主体となって発掘調査が行われている。今回の調査は、一般県道椿・川西線（椿～松原地区）整備事業に伴う第2次の緊急発掘調査である。調査面積は、遺跡にかかる事業実施区域を対象にした1,600m²である。遺跡全体のごく一部が明らかにされたに過ぎないが、第1次調査の内容も踏まえ、今回の調査で得られた資料をもとに考察を加えて以下にまとめる。

1 遺構について

今回の調査で検出された縄文時代の遺構は、出土土器の検討より前期初頭～前葉と、中期末葉～後期初頭との二時期に分かれることが判明した。その分布状況では、縄文前期の遺構群が調査区東側を中心にした区域に、中・後期の遺構群は調査区西半部に集中している。すなわち、遺跡は白川河岸段丘の台地上に立地しているが、縄文前期には舌状に張り出した段丘東端部が生活の場であったのに対し、中・後期では台地中央部から西辺部を主体としていた様子が窺い知れる。調査区内の検出遺構は土壙・小穴であり、第1次調査を含め住居跡が確認されていない。調査対象となった範囲が段丘に一部に限られたものなので、各時期の遺構の分布や表面踏査の遺物の散布状況から東西端部に向かって広がることが予測され、住居跡は段丘縁辺に沿って存在する可能性が高い。

今回検出された土壙30基は、形態的にフラスコ状や皿状のもの、それに円筒状を呈するものなどがある。3基のフラスコ状土壙は貯蔵穴と考えられ、壙底に密着する遺物が無いものの覆土内出土遺物から縄文前期の構築と捉えられる。また、縄文中・後期の土器を多く含む土壙は平面形が円形で皿状を呈するのが特徴で、廐棄穴と推測できる。これら土壙の集落跡での位置関係等は、調査面積の限定もあり今後検討すべき問題と考える。

SM1 経塚は、小石一個に一字づつ経典の文句を書き写したものとまとめて埋納した「一字一石経塚」である。このように経塚とは、書寫した仏教経典を主体として地中埋納した所で、一般に封土や石組構造などを伴っており、今日も信仰の対象となっているものがある。平安時代中頃に発生し同後期に最盛期を迎えるが、その後も江戸時代にかけて盛んに造営される。造営の目的は末法思想に由来し、仏法の衰滅を怖れて後世まで経典を保存しようと企図したのが本来の主旨とされている。しかし、時代の推移とともに本来的な目的は次第に稀薄となり、鎌倉時代以降は庶民信仰とも結び付いたりして多彩なものに変化している。いずれにせよ、本経塚や第1次調査時に確認された2基の三段塚の存在、それに遺跡名でもあるこの地の小字が「郡之神」ということも含め、当地が古来から信仰にかかるる靈域であったことは事実である。

2 遺物について

出土した縄文土器は、大部分が小破片で全体の器形が分かるものは少なく、遺存状態が良くないものは施文された文様も磨滅が激しく不明なものが多い。また、遺構内から比較

的まとまった資料が得られたものはSK27・107等一部の土壌に限られる。したがって、図示した資料は遺構内外出土器の他、包含層出土で遺存状態の良いものを中心とした。これらの土器群は、前述したように縄文時代前期前葉と中期末葉～後期初頭という、二つの時期に大別できるものである。

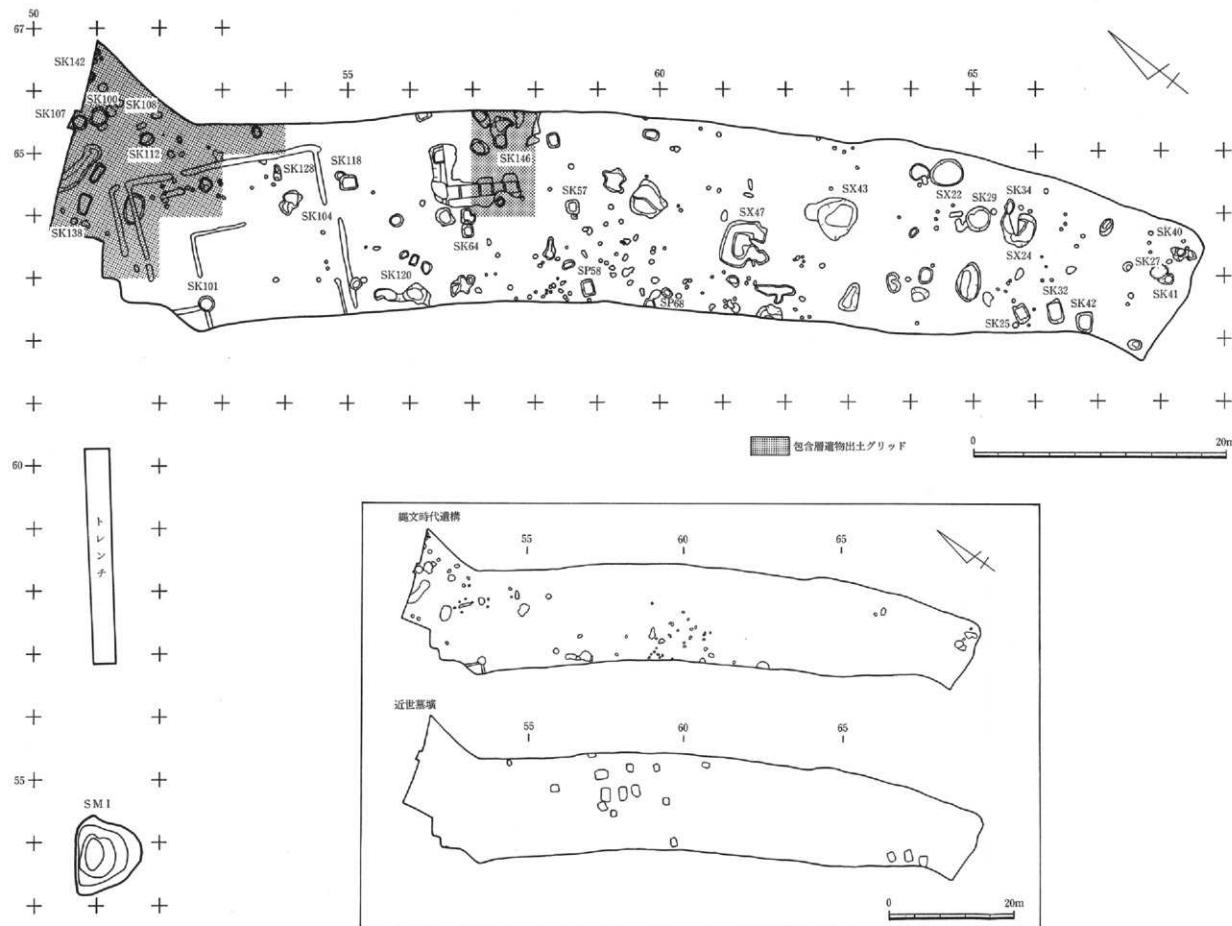
第Ⅰ群土器1類は、口縁部に三角形や菱形の文様構図を描出し、地文となるループ文を充填していく技法、または地文を磨消して同様の無文帯を作出する手法によるものである。この内容から時期的な位置付けとして、東北地方南部の上川名II式と大木1式の中間型式として捉えられている桂島式に併行させ、縄文前期初頭に比定しておく。2類・3類土器は、ループ文や組紐文などの回転縄文（地文）だけの文様に統一され、口縁部文様帯や沈線文などによる装飾文様を持つものが少ない。細片資料からの推察となるため判断は難しいが、大木1式～2a式に属するものである。

第Ⅱ群土器は、縄文中期末葉のいわゆる文様内地文充填土器群である。すなわち、文様は隆線や沈線を用いて縁取ったもので、その内部に地文を充填するということが特徴である。文様は深鉢の場合、口縁部から胴部へ連続して展開するものが多く見られる。横円文やS・C字状文とそれらの変化した文様が主体となり、文様表現技法として沈線系（1類）と隆線系（2類）および両者の組み合わせたもの（3類）がある。これらは大木10式に比定されるものであるが、文様表現技法により1類中で、幅広の線で描いた後にミガキ調整を加えた沈線が作出される15～17・23や、3類中の19～21は大木10式でも古相を示す土器に指摘される。また、裾広がりの隆線頂部に稜を持つ2類土器や、無調整で幅の狭い沈線が用いられる22・29、口縁部に磨消縄文が見られる18等は、大木10式新相の要素を持つと考えられる。

第Ⅲ群土器は、SK100・107土壌等からの出土が多く第Ⅱ群土器と併存することや、器形・口縁部形態の特徴および胎土から見て、これらに併行もしくは後続するものと捉えることができる。したがって、与えられる年代は中期末葉の大木10式から、仙台湾周辺地域を中心とした縄文後期初頭の門前式に比定されよう。

石器は整理箱にして6箱が出土した。その内訳は、打製石器とその製作に関連するフレイク・チップが780点、礫石器が41点の計827点である。打製石器の器種は石鏃・尖頭器・石匙・石寛・擴器・削器の他、両尖匕首が1点含まれる。礫石器には敲石・磨石・凹石・石皿などがある。これら石器については、前章において製作技法を基に分類を行ったが、出土土器と同様に縄文時代の所産であることから、縄文前期～後期初頭にかけてのものと考えられる。

打製石器の大半は剥片ないし碎片で、いわゆるtoolとして確認できたものは35点に過ぎない。全体として石鏃や尖頭器が少なく、石匙・石寛が多い。特に石匙は全てがその側縁を刃部とする縦長のものである。また、両尖匕首の出土例は東日本一円に広がるもの遺跡・出土点数とも数少なく、石材が黒曜石であることも含め貴重な資料である。これらの特徴から打製石器の多くは縄文前期に属すると判断される。



第3図 遺構配置図 (S = 1:300)

図 版



遺跡遠景(北西から)



調査区近景(西から)



重機械粗掘り(東から)



面精査(南東から)



遺構精査(土壌)



遺構精査(経探)



調査風景(北西から)



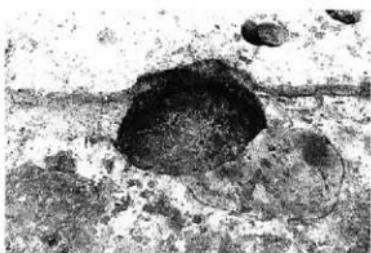
遺構検出状況(南西から)



遺構発掘状況(南西から)



SK27 土壌土層断面



SK27完掘・SK41プラン検出状況



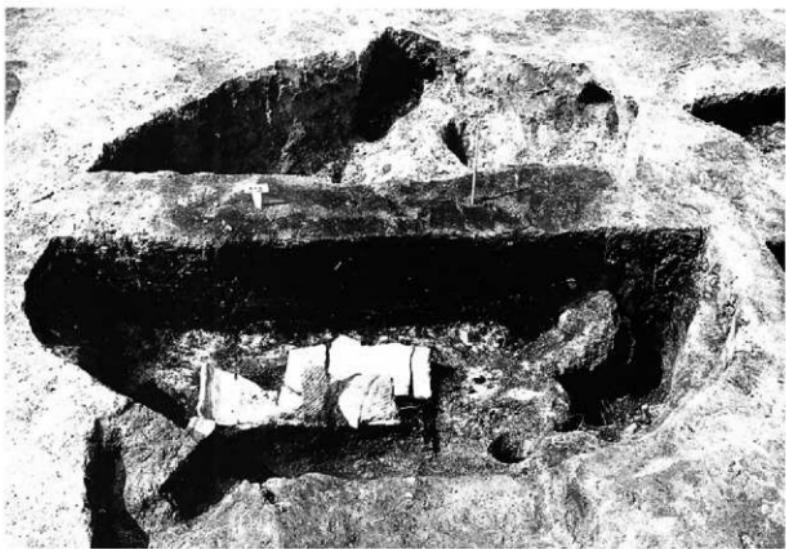
SK41 土壤完掘状況



SK40 土壤完掘状況



SK27・40・41土壤完掘状況

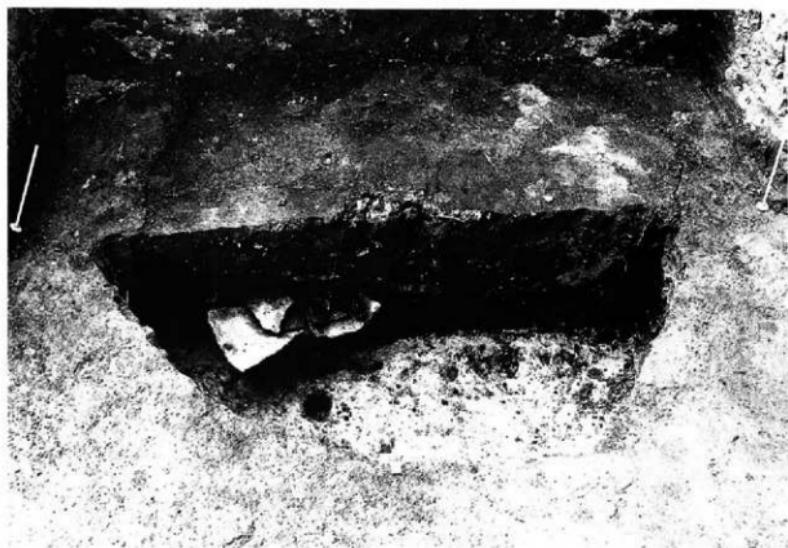


土层断面



完提状况
SK100土壤

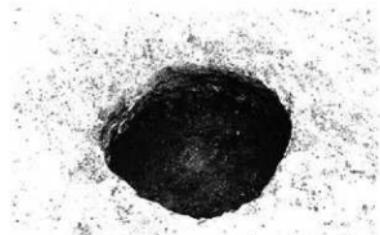




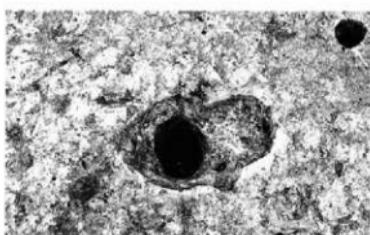
土層断面



遺物出土状況
SK107土壤



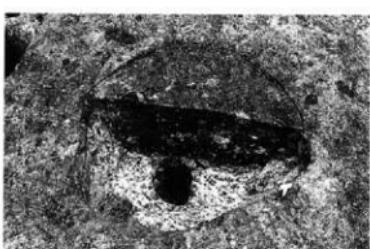
SK29土壤完掘状況



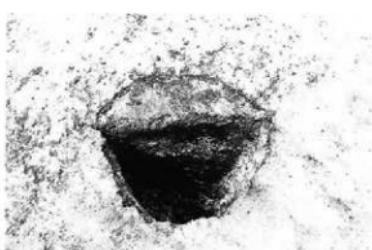
SP58ピット完掘状況



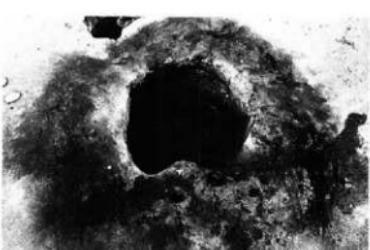
SP68ピット完掘状況



SK106土壤土層断面



SK108土壤土層断面



SK112土壤完掘状況



SK142土壤土層断面



SK108・143土壤完掘状況



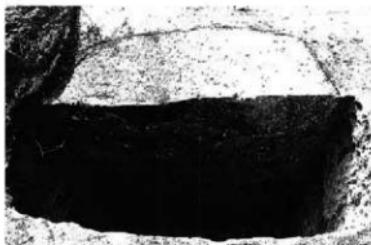
SK104土壤完掘状况



SK128土壤半截状况



SK32墓填完掘状况



SK42墓填土層斷面



SK57墓填土層斷面



SK64墓填土層斷面



SK146墓填完掘状况



調査前状況



測量状況



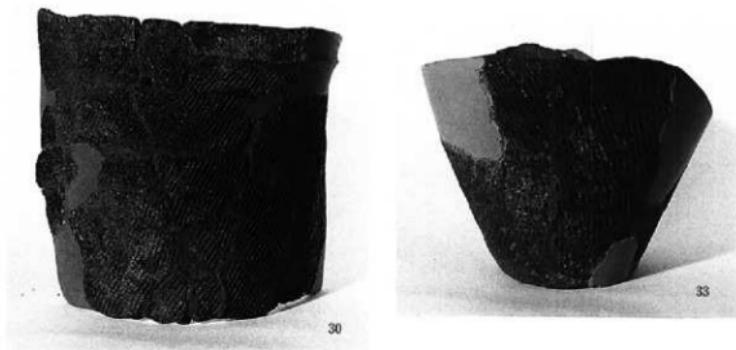
土層断面



土層断面

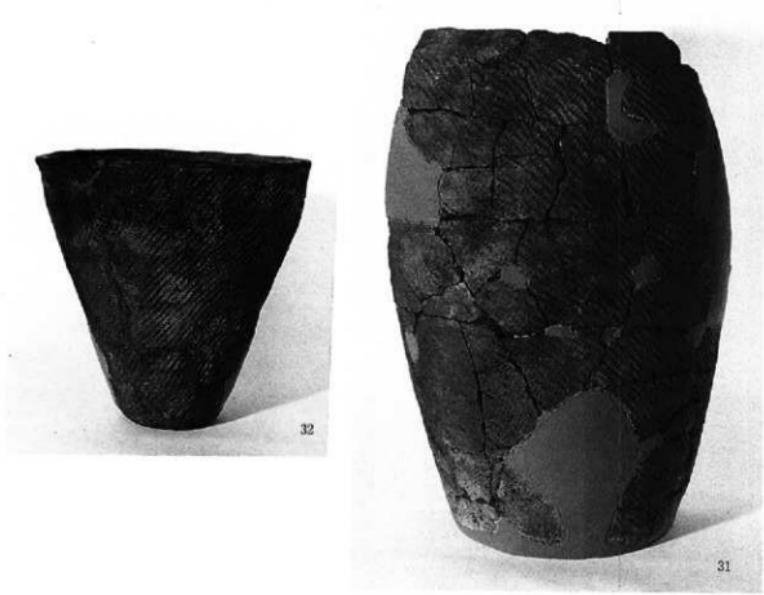


経石出土状況
S M I 経塚



30

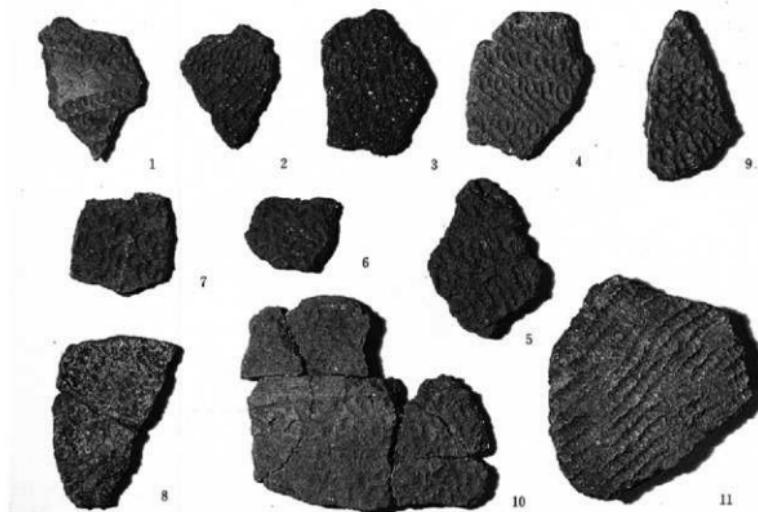
33



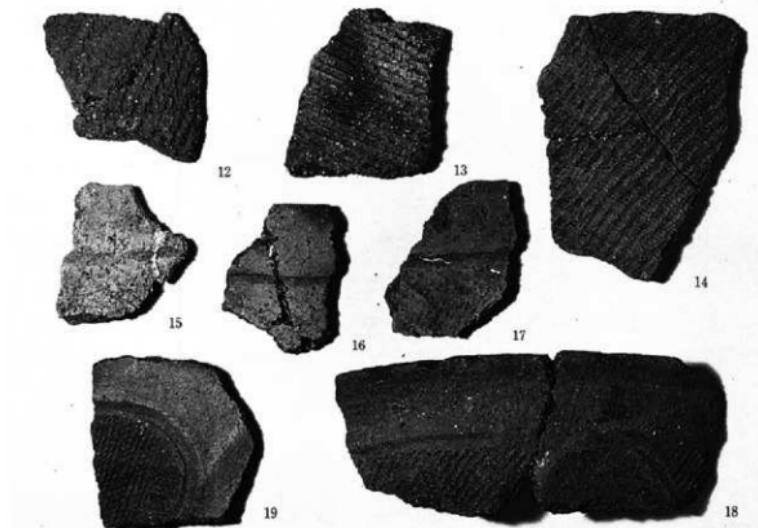
32

31

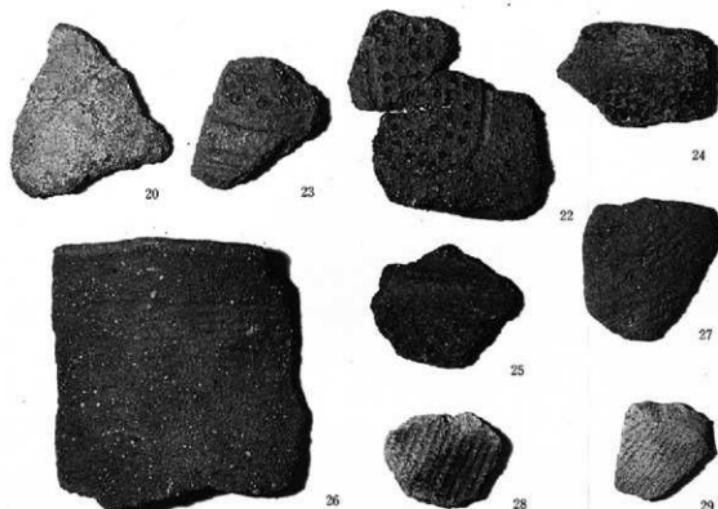
縹文土器(I) 1 : 4



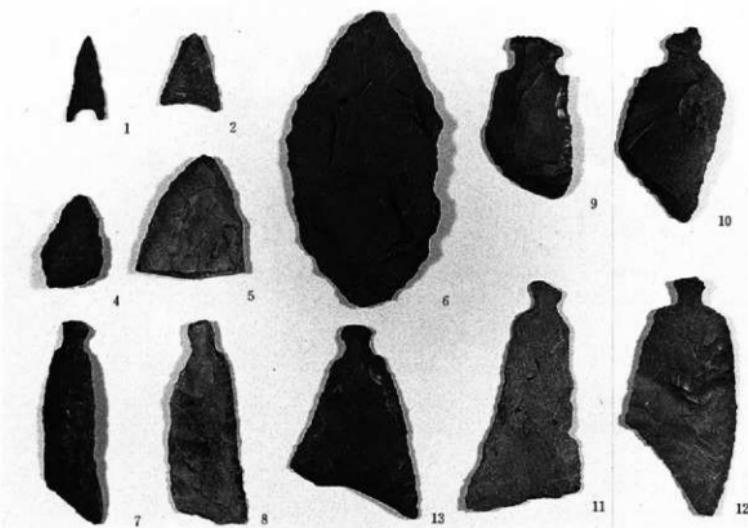
縄文土器(2) I : 2



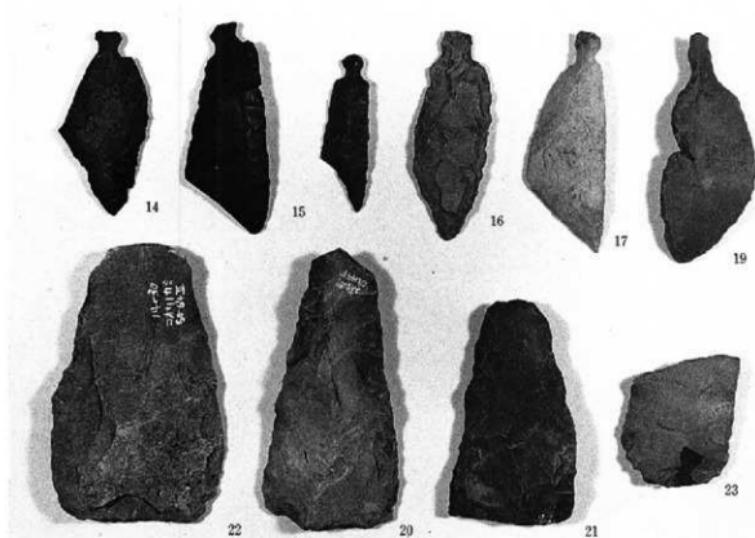
縄文土器(3) I : 2



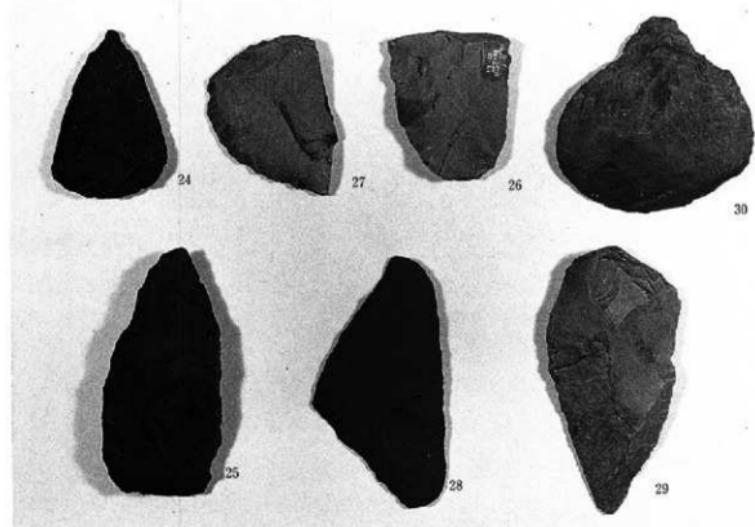
縄文土器(4) I : 2



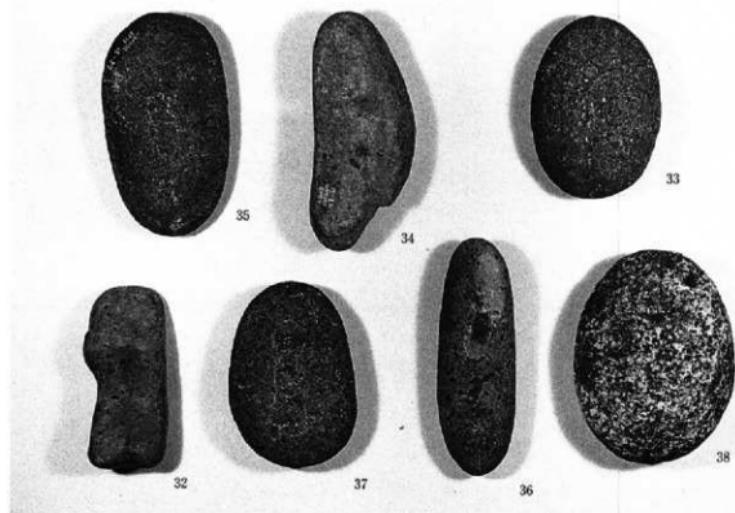
打製石器(I) 2 : 3



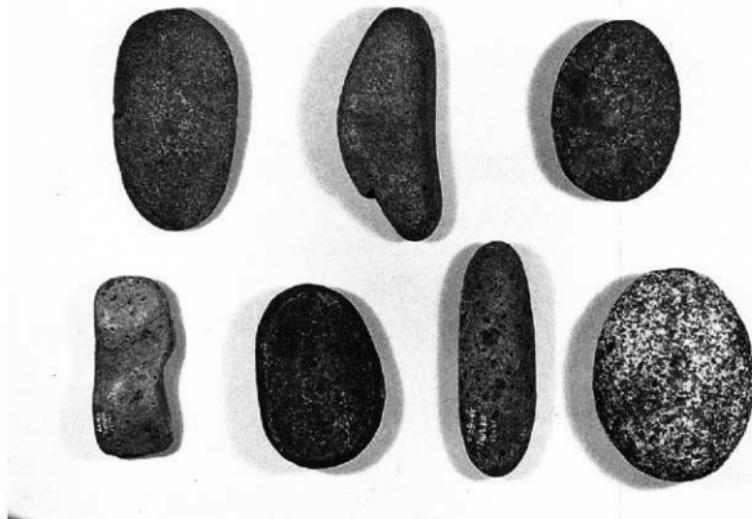
打製石器(2) 2 : 3



打製石器(3) 2 : 3



敲石・凹石(表) 1 : 3



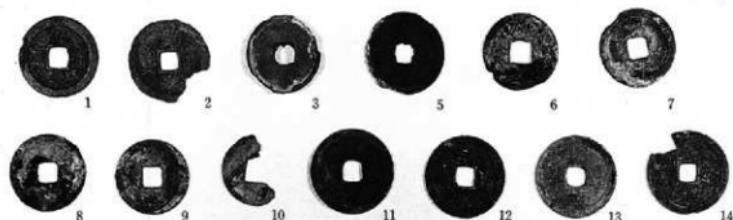
敲石・凹石(裏) 1 : 3



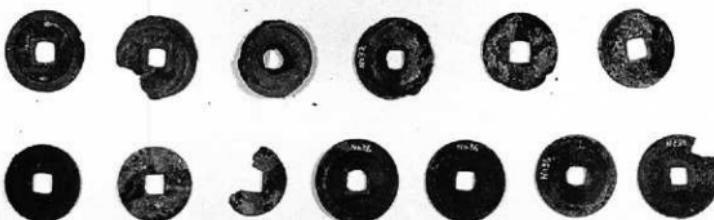
石皿(表)



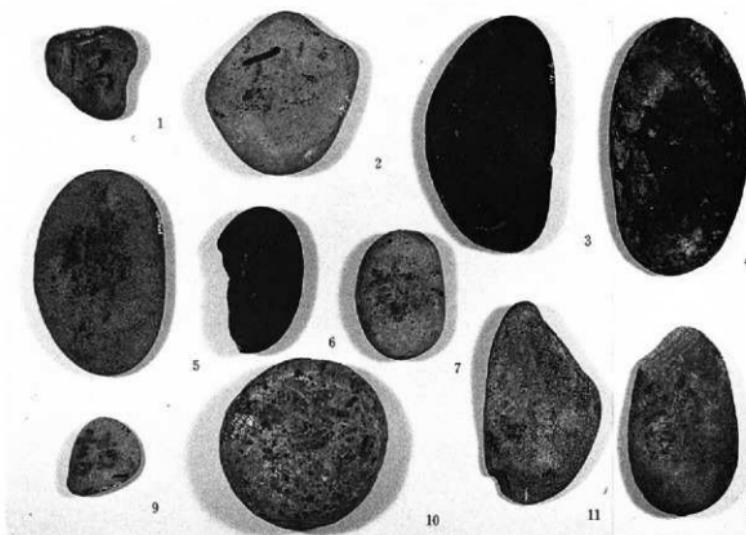
石皿(裏)



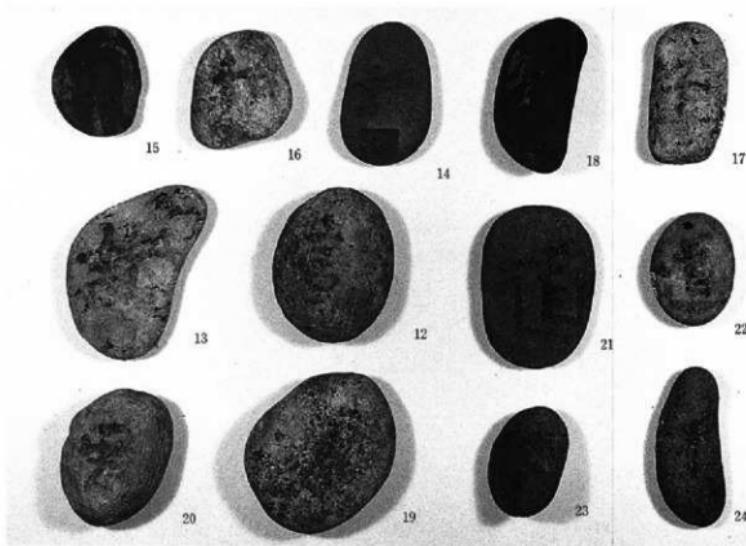
古錢(表) 2 : 3



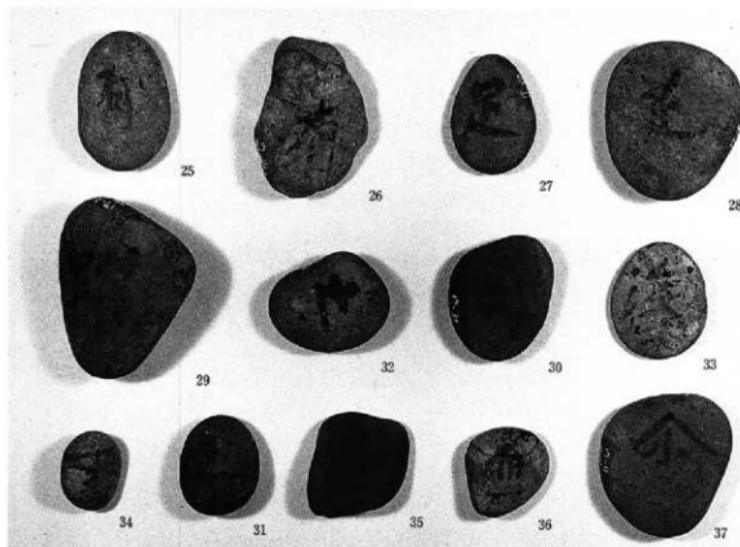
古錢(裏) 2 : 3



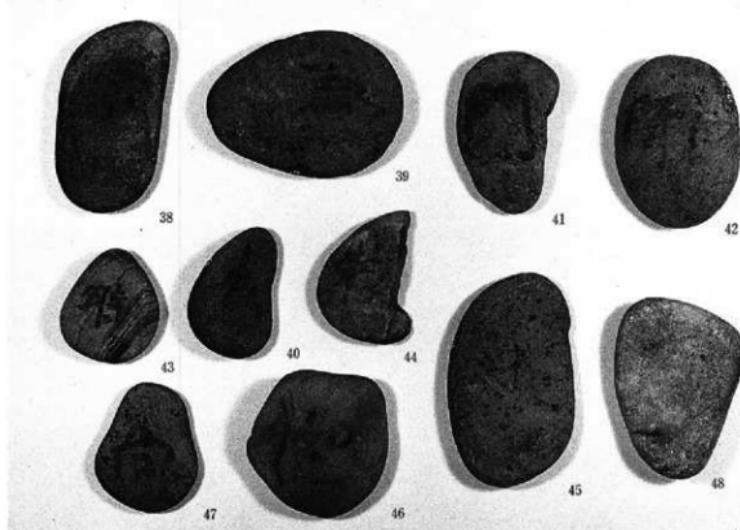
絆石(I) I : 2



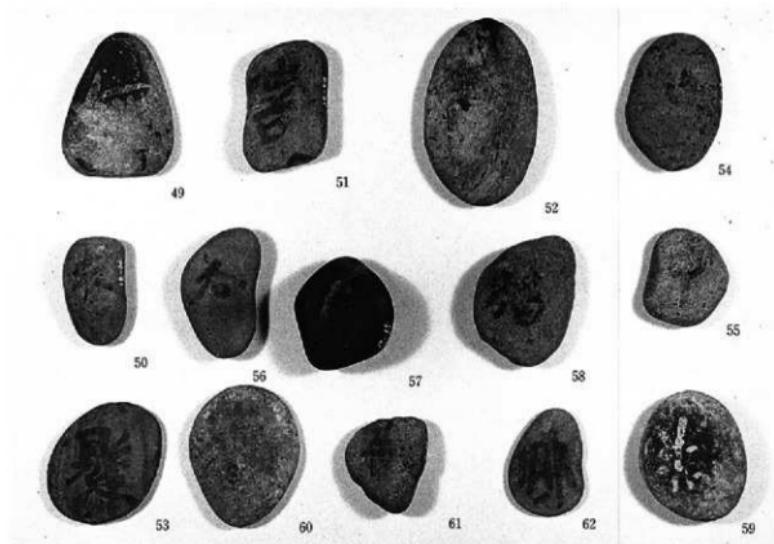
絆石(II) I : 2



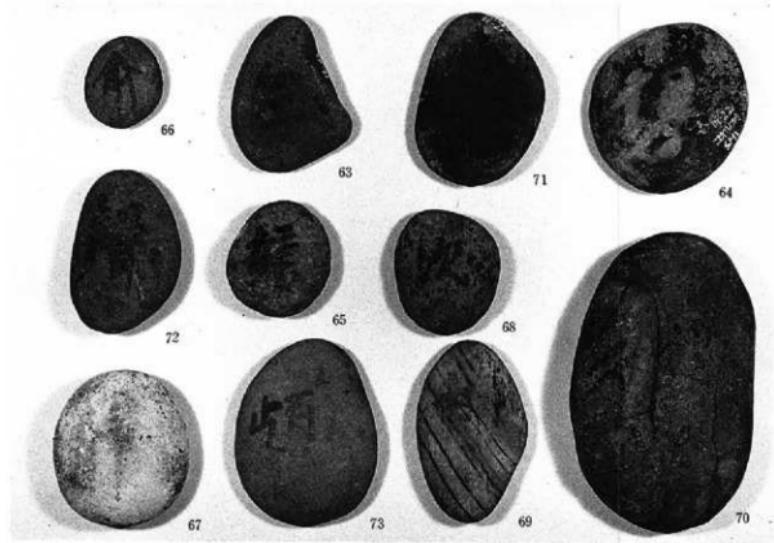
経石(3) 1 : 2



経石(4) 1 : 2



経石(5) I : 2



経石(6) I : 2

山形県埋蔵文化財調査報告書第191集

郡之神遺跡
第2次発掘調査報告書

平成5年3月25日 発行

発行 山形県教育委員会
印刷 藤庄印刷株式会社
